
それのおとしものStrikerS

蒼碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そらのおとしものStrikers

【Nコード】

N79590

【作者名】

蒼碧

【あらすじ】

智樹が見た夢の繋がった先はミッドチルダだった！？オマケにデバイスまで手に入れてやりたい放題！？誰かコイツを止められないのか！？暴走だらけのそらのおとしものクロスリリカルなのはStrikers！今、全裸王^{めっしや}がミッドの地に降り立つ！？

「話」智樹、異世界に行く。」（前書き）

友人の希望で書いて見ました。更新はなるべく頑張るのでよろしく
お願いします！

「話」智樹、異世界に行く。」

side 智樹

智樹「止めろそはら〜！」

そはら「いいや止めないもん！今日という今日は許さないんだから！」

.....

俺の名前は桜井智樹、平和を愛するどこにでも居そうな普通の中学生だ！

.....え？何で追われてんのって？それは俺がアイツ.....幼なじみの月見そはらのパンツをまだ持ってたのをちようど起こしに来たアイツに見られたからさ。.....え？最悪だって？仕方ないじゃない！男だもの！そこにパンツがあるんだもの！

ガシッ！

智樹「げっ！？」

そはら「ともちゃん.....覚悟.....出来てるよねえ！」

そはらは俺を掴み小さい頃に俺が覚醒させたその必殺の殺人チヨツプの構えをとる。

智樹「ま、待て！そはら！は、話せば分か・・・」

そはら「ともちゃんの、バカアアアアアアアッ！」

ズババババババババツ！

智樹「ギヤアアアアアアアッ！」

そはらの連続チョップが唸り、俺はボロクソの塊となる。

智樹「げふっ・・・！」

そはら「もう！少しは懲りた？」

智樹「はい・・・すみません・・・。」

そう言つて俺が立ち上がるうとするとな隣に羽の生えた女の子が心配そうに顔を覗き込みながら並ぶ。

？「大丈夫ですかマスター・・・？」

智樹「ああ大丈夫！ありがとなイカロス。」

そう、この娘の名前はイカロス。ある日突然空から落ちてきて、どうゆう訳かマスター、と俺に仕えるようになっていた。ま、いろいろすごい能力とか持つてるからいろいろと助かってるけど。

そはら「そんなに心配しなくても大丈夫だよ、イカロスさん。ともちゃんは丈夫だし。」

智樹「お前は少しは心配しろよ！」

全く……！幼なじみなんだから少しは遠慮しろっての！

イカロス「マスター……本当に大丈夫ですか……？」

智樹「あ、いやイカロス、俺は大丈夫だぞ？元氣マンタン！いつも
どりの桜井智樹だぜ！」

イカロス「そうですか……。」

イカロスはどことなく嬉しそうだ。

そはら「あ、そうだ！急がないと遅刻するよ！？」

見ると時計は8時半を回っている。

智樹「やべっ！？イカロス、トースト持ってきてくれ！」

イカロス「はい、マスター……。」

イカロスとそはらは俺の部屋から出る。俺は着替えを済ませ、リュ
ックを持って下に下りる。

智樹「わりい、遅れた！」

そはら「いいから急がないと！」

？「おはよトモキ、早く！」

？「早くしなさいよ！このバカ！」

智樹「おはよ、ごめんなニンフ。で、アストレア、お前はバカって言うな！このバカ！」

アストレア「何よバカ！」

俺はこの二人、ニンフとアストレアとそれぞれ話す。

ちなみにイカロスとこの二人は同じエンジェロイドである。エンジェロイドというのはイカロスが言うにはシナプスって所が造った製品、らしい。まあ詳しい事はまだまだ分かんないけど……。

イカロス「マスター……コレ……。」

そうこうしてる内にイカロスがトーストと牛乳を持ってきた。

智樹「サンキューイカロス！いただきます！あんぐっ！」

パクパクモグモグゴクゴクゴクン！

トーストを頬張り牛乳で流し込んで朝食を終える。

智樹「よしっ！行こうぜみんな！」

俺たちは家から出て学校へと急いだ。

俺たちはどうにか学校に間に合った。疲れたが結果オーライってことで！教室に入り、自分の席について授業を聞く。はぁ・・・良いねえ・・・。何も起こらず、平和に時間が過ぎる。やっぱり平和が一番だねえ・・・！最近はいろいろあつて平和が乱されっぱなしだったからなあ・・・。

智樹「ふわぁ・・・。」

あれ・・・？なんかね・・・むい・や・・・。

・・・

目を開けるとそこは燃え盛る空港でした

・・・

智樹『え？何ここ？』

周りは燃え盛る炎、炎、炎だらけ！

智樹『あっちいな・・・。夢じゃねえのか・・・？』

頬をつねってみるが感覚はある。いてえ。

智樹『と、とにかく誰かいないかな・・・？』

俺は炎の中、歩き始めた。

side?

?「お姉ちゃん……どこ……?」

アタシはお姉ちゃんとはぐれ、一人炎の中を歩いていた。

?「お父さん……お姉ちゃん……!」

何時間も歩いていて疲れが溜まっていたのか、アタシは大きな広場の真ん中に座り込んだ。

大粒の涙がポロポロ流れ、煤だらけの手で必死にそれを拭う。

?「うぐつ……ぐすつ!……痛いよ……怖いよ……
こんなの嫌だよ……帰りたいよ……!」

泣きながら下を向いていると不意に後ろで音がする。

振り返ると後ろに立っていた石像が倒れてきていた。

?「ひい……!」

もうだめだ……!目を瞑って頭を抱えた時だった。

?「危ない!」

その声と共にアタシの身体は抱えられ、石像との衝突を免れた。そ

の抱えてくれている人を見るとそこにはアタシより年上そうな男の子がいた。

side 智樹

暫く歩くと、大きな広場に出た。そこで俺はある少女を見つけた。青いボーイッシュな短髪が特徴的な女の子だ。

（こんなところで・・・迷子か？）

智樹『オーイ！』

少女は泣き続けている。

（聞こえないのか・・・？）

ピシッ！

智樹『え？』

音がした方を見ると石像にひびが入り、石像が傾く。その下にはその女の子がいた。

俺は次の瞬間走り出していた。

智樹「危ない！」

女の子の所にたどり着いた俺はそのままその娘を抱えて走る。

ドズウーン！！

石像が倒れるが、俺たちは無事だった。

智樹「大丈夫か？」

青い髪の少女はその碧色の瞳を大きく開きこちらを見る。

？「お兄さん……誰……？」

智樹「えつと……。」

俺は少し戸惑うが周りの炎が激しくなっていくのに気付く。

智樹「とりあえずここを出よう！」

少女は無言で頷く。俺は扉を探すが、どの扉も瓦礫に阻まれていた。

智樹「くっそ……！」

？「お兄さん……！」

ここまでかと思っていると俺のポケットが輝く。

智樹「コレは……！」

？「何……？」

ポケットに手をつ込んで取り出すと光り輝くカードが現れる。

智樹「イカロスのカード！そっぴゃ一枚預かってたんだっけ！」

そしてカードが変わり小さな装置になる。

智樹「こうなりやイチかバチかだ！」

ボタンを押す。すると光が俺たちを包み込み次に気付いた時には外に出ていた。

智樹「……どうやら転送装置みたいなものだったみたいだな、コレ。」

？「うわァゝスゴいや……！」

智樹「あ、そうだ。大丈夫か？」

？「うん！ありがとうお兄さん！」

少女は満面の笑みでこちらに微笑む。

？「私はスバル・ナガシマって言うんだ。お兄さんは？」

智樹「俺は智樹、桜井智樹だ。」

そう言いながら持っていたハンカチで顔を拭いてあげた。

スバル「本当にありがとう！トモキお兄ちゃん！」

智樹「いやあ、それ程でも。とりあえず無事で良かったよ。」

俺はスバルちゃんに微笑み返した。そうしていると、

？「その人！大丈夫ですか！？」

いきなり上から声がする。俺が上を向くと・・・。

？「こら！起きんか桜井！」

智樹「はっ！」

起き上がると目の前には自称数学者の数学教師竹原。

竹原「・・・廊下、立つとれ。」

智樹「・・・はい。」

？「変な夢だと？」

智樹「はい・・・！そうなんスよ守形センパイ！」

放課後、俺は新大陸発見部の部室にいた。新大陸発見部とはその名の通り、この世のどこかに存在するであろう新大陸を探求するという大変珍妙奇天烈な部だ。ちなみに、俺が今話しているのがこの部の部長、空美中学校一の秀才にして変人、守形英四郎センパイだ。

そはら「あの何時もの．．．翼を持った女の子が出てくる夢じゃなくて？」

智樹「ああ、今日のはなんかこう．．．空港が火事で．．．なんか夢にしては妙にリアルで．．．」

守形「ふむ．．．分かったぞ智樹。」

智樹「え！本当ツスカ！？」

守形「お前が見た夢の正体は．．．！」

智樹・そはら『正体は．．．？』

守形「新大陸だ！」

智樹・そはら「．．．．．」

守形「何だそのまたかって顔は．．．まあいい。智樹、お前の夢がシナプスに繋がっている事は前に話したな？」

智樹「はい．．．でもそれが何か？」

守形センパイはこちらを向き、眼鏡を押さえながら語る。

守形「つまり、今回もそういう事だ。」

そはら「それって．．．また別の所にもちゃんの夢が繋がったってことですか？先輩？」

守形「ああ、そういう事になる。そして智樹の訪れた場所こそ、新大陸に違いない！」

ザッパーンとセンパイの後ろに荒波が波打つのが見える。そしてセンパイは俺の肩に手を置くと、

守形「ということで智樹。夢の中に行つてこい。」

智樹「まさかまたアレですか！？つーか何で俺！？」

？「それは、桜井君が夢を見た本人だからじゃないかしら？」

智樹「会長まで！何でなんだよ！」

そう微笑みながら言うこの人は俺たちの空美中の生徒会長、五月田根美香子先輩だ。どうやら守形センパイとは幼なじみのようで何かと連んでいるのだが……。

会長「まあ行かないなら色々と桜井君の恥ずかしい秘密を……。
「わぁー待って！行きます！行きますから！」そう？残念ねえ。」

（はぁ。何で俺の秘密を会長が知ってたんだよ！ま、仕方ねえか。
バレてそはらにやられるよりかは……ッ！）

殺気を感じ振り返るとそこには「桜井君秘密ファイル」と書かれたファイルを手にした会長とそれを見ながらどんどん気を高めていくそはらの姿が、

智樹「あ、あのーそ、そはらさん？」

そはら「……………とめちゃん。」

そはらの手が高く上がり……………、

side 守形

守形「で、ニンフ。入れそうか？」

ニンフ「うん、大丈夫だと思う。ゲートも安定してるし、」

守形「よし、智樹。行けるか？」

智樹「な、何とか……………」

顔じゅう痣とタンコブだらけの智樹はフラフラになりながらも言う。

守形「よし、行ってこい智樹！新大陸へ！」

智樹「はいはい。」

智樹が展開したゲートへと入っていく。全身が消えた時だった。

ニンフ「ッ！スガタ！ゲートが不安定になってきてる！」

守形「何っ！？智樹に連絡は！？」

ニンフ「駄目！繋がらない！」

イカロス「マスター……！」

イカロスがゲートに走り、入っていく。

そはら「イカロスさん!？」

イカロスの全身がゲートの中へと消えると、ゲートは閉じてしまった。

守形「イカロス! 智樹……！」

俺たちは呆然と立ち尽くすしかなかった……。

一話・了

「話」智樹、異世界に行く。」（後書き）

という事で第一話！いかがでしたでしょうか？作者の蒼碧でございます。レジェンジャーの方から来てくれた人はどうも、そして初めての人はよろしく願います！という感じで始めてみました。・
・なんか……。すいません。レジェンジャーを見てくれた皆さん、早く書けよ！、関係ないの始めんなよ！と言って下さって結構です。

そしてそらのおとしもの、リリカルなのはの検索でここに来ていただいた皆さん、このような駄文ですいません。自分はまだまだ若輩者なので、色々ご迷惑をお掛けするかもしれませんが、一生懸命に頑張っていきたいと思います！ではまた次回、よろしく願います！

次回、全裸王、ミッドに立つ！

二話「全裸王（ともぎ）、ミッドに立つー！」（前書き）

半日でもう1000hit越えだと・・・！リリなのとそろおと
パワーハンパねえ・・・！というわけで第二話、どうぞ！

二話「全裸王(ともき)、ミッドに立つ!」

side 智樹

光り輝くゲートを抜けてたどり着いたのは先ほどの火事の空港とは
うって変わって超高層のビル街だった。

智樹「・・・・どこだここ?」

(まったく・・・・またニンフの奴あん時みたいにミスったな?)

とりあえず俺は周りを散策するためにぶらぶらと歩き始めた。

・・・・・・

智樹「はあゝスゲエなあ・・・」

周りは一面ビル、ビル、ビルの山、俺たちの空美町じゃ考えられな
い風景だ。

智樹「もしかするとここって本当に新大陸とか!？」

そう言いながら歩いていると突然前の方で爆発が起こる。

ドカンッ!

智樹「ッ!? な、何だ!？」

見ると巻き上がっている煙の奥から丸い形のロボットたちが現れた。

智樹「ロボット、ト？何でこんなに……？」

そうするとそのロボットたちは俺に向かって来る。

（何だ……？ま、まさか俺、命とか狙われてる！？）

ロボットの目？が光る。駄目だ……！と思っていた時、

ガキッ！

……目を開けると、ロボットたちはショートしていて、俺の目の前には羽を大きく広げたアイツがいた。

イカロス「ご無事ですか？マスター……！」

智樹「イカロス！？」

そう、そこにはイカロスがいた。

智樹「お前！何で！？エンジェロイドは夢は見れないからダイブゲームは出来ないんじゃない？」

イカロス「その事ですかマスター……どうやらここは夢でも地球でもありません……。」

智樹「何だって！？」

俺はイカロスの言葉に驚愕する。何故なら前に俺の夢が繋がったシナプスは俺たちの住む空美町の真上にあり、ギリギリ地球上には存在していたからだ。

イカロス「先ほどマスターを捜していた時にこの辺りの地形をサーチしてみたのですが・・・地球のどの地域にもこの辺りの地形は当てはまりませんでした・・・。」

智樹「そうか・・・。で、何でお前はこっちに？」

イカロス「はい・・・実はマスターがゲートに入ってしまった時、ゲートが不安定になってしまって・・・マスターを追って来たのですが私がゲートから出た時に完全にゲートが閉じてしまって・・・。」

智樹「え！？・・・ってことは・・・帰れない！？」

イカロスが顔を少し傾け頷く。俺は地面に膝をついて落ち込んだ。ああ・・・何だか色々あったけど・・・遂に地球じゃない所に追い出されたか・・・。

俺がガッツリ落ち込んでいると、イカロスが俺を掴む。

智樹「イカロス・・・！？」

俺はイカロスを見るが雰囲気が違う。

イカロス「マスター・・・、囲まれたようです・・・。」

周りを見渡すと辺りには一面に先ほどの丸い形のロボットの他に楕

円形や、空を飛んでいるロボットが勢ぞろいし、俺たちを囲んでいた。

智樹「ッ！？」

イカロス「大丈夫です……、マスターは……！」

イカロスは翼を大きく広げながら俺を掴んで空へ浮かぶ。

イカロス「マスターは私が守ります……！」

迫ってくるロボットたちを避けながらイカロスはアルテミスを撃つ。

アルテミスはロボットに当たっていき、ロボットは火花を上げて爆発していく。

あらかたのロボットが片付き、俺たちが空から降り立った時だった。

イカロス「ッ！マスター……！」

イカロスに押されて倒れ込む。イカロスの方を振り向くと、楕円形型のロボットのブレードがイカロスの肩を貫いていた。

智樹「ッ！？イ、イカロス！？」

イカロスはアルテミスでロボットを倒したが、そのまま倒れ込む。俺はイカロスの下に駆け寄った。

智樹「馬鹿！何で……何でお前！」

イカロス「ご無事ですか・・・？マスター・・・」

イカロスは顔は無表情なままこちらに向ける。その顔はどことなく心配とイカロス自身の精一杯の笑顔が入り混じった表情にも見えた。

智樹「俺が無事でもお前が！」

イカロス「・・・ご無事なのですね・・・良かった、た・・・」

「

智樹「イカロス！？」

イカロスは目を瞑った。どうやら傷は深くはないらしい。ホッと胸をなで下ろしていたのもつかの間、また別のロボットたちが俺たちを囲む。

智樹「ッ・・・！」

（どうする・・・！イカロスは戦えないし、逃げ切れるかも分からない・・・！どうする・・・！）

そうしている間にもロボットたちが近づく。

ヤバイ・・・！？、そう思っていた時だった。突然、俺のポケットが光りだす。原因は、そう、カードだ。

智樹「コレって・・・！」

俺はイカロスから二枚のカードを預かっていた。一枚目は先ほどの夢の転送装置みたいな。二枚目が今光ってる奴だ。

？『親方様……！私に名を下され！』

智樹「へ？誰だ！？」

突然の声に目を丸くする。

？『何でもいい！とにかくテメエの好きな名前でもいい！言え！』

声がする方を探すか、見つからない。いや、たぶん十中八九このカードからなんだろうけど。

？『君はその子を助けたいんだろう？』

智樹「そりゃあそうだけど……！いきなり名前つけろって言われたって！」

？『ああもう！早くしろ！』

俺はあたふたしながら空を見上げる。見ると三つの星がくつきりと輝いていた。

智樹「え、え〜と、え〜と！ああもう三つ並んだ星い！」

？『御意！英語変換……完了！トリニティスター！出陣！』

言葉と共に光が溢れ俺を包む。光が止むと同時に周りのロボットたちが爆発した。

智樹「ゲホッ！ゲホッ！な、何だ……コレ……！？」

煙が晴れ、ビルの窓に映る俺の姿を見た時、俺は何時もの空美中の制服とは全く違う服を着ているのに気づいた。

頭に真つ赤なハチマキをつけ、右側の袖が無く、左側に鱗のようなものが付いた黒いジャケットの下に、白を基調に青い色があしらわれた服をきて、その下に何時もの空美中の制服のシャツとネクタイが見えている格好に、何か大きな対の三矛の槍を持っているという、摩訶不思議な格好であった。

智樹「な、な、な、何なんだよこの格好!？」

スター『コレがテメエの力つてこつた。オイ!俺にやらせる!』

スター?『貴様!親方様に向かって何て無礼を!』

智樹「へ?やらせろつて……どうすりゃいいの?つか性格が分かんねえだけど!？」

スター?『そうだね……、まだ戦闘には慣れてそうにないし、シエルがやれば良いんじゃないかな?』

スター『おつしゃ!んじゃ、トモキ!シエルブリッドモードだ!叫べ!』

智樹「へ!?え、え」と、シエルブリッドモード!？」

俺がそう言つと、三矛の槍が光り始め、光が俺の腕に集まっていき、俺の腕は装甲に包まれた凶暴な形になり、背中には回転式のフィンがついた。

智樹「な、何い！？何じゃこりやあつ！？」

スター『さあ行くぜ！』

智樹「何！？おわあああああつ！？」

その時の俺は正に腕に引つ張られている状態だった。腕を前に出し、背中のフィンが推進するようにブーストをかけ飛んで行く姿はまさしく見えない誰かに腕を引つ張られながら進んでいるかのようだった。

スター『シエルブリッドバースト……！』

智樹「待て待て待て！いや待って下さい！？」

スター『輝け！もっとだ！もっと！もっと輝けえええええ！』

腕の装甲が展開し、周りの物を吸収し始め、七色の輝きと共に俺の腕がドンドン輝き始めた。

トリニティスターが俺を動かし、敵へと突っ込ませる。

智樹「いやいや待って！？ねえ聞いている！？」

スター『衝撃のお！』

智樹「いやだから待つ……」

スター『ファーストブリッドオオオオオオッ！』

智樹「いやだからあああああつ!？」

そのまま俺ごとトリニティスターはロボットたちに突っ込んだ。

ドッカーン!

言うなればそんな擬音が良いだろうか、そんな音と腕に伝わるロボットの破壊していく感触が続き、やがてそれは終わった。

スター?『……、敵影感無し。敵部隊の殲滅を確認。ミッシェンコンプリート。機能を待機状態に移行する。』

そうして俺を光が包み、格好が何時もの空美中の制服に戻り、集まっていた光はカードに戻って俺の手元に収まる。カードを握ると疲れが一気に来たのか、俺はその場に座り込んだ。

智樹「つ、疲れた……!そ、そうだイカロスは!？」

イカロスの所に駆け寄る。とりあえず止血の為に制服で紐を作り、イカロスの肩をキツく縛る。残った部分は枕にして、イカロスの頭を載せてやった。

智樹「とりあえずよし、と……しかし、何だっただんだアイツら?」

俺は先ほどのロボットの事を考え始める。

(イカロスが言うにはここは地球じゃないらしい……じゃ一体どこだ?それにこんなロボットしか居ない世界なのか?ここは?)

そんな風に考えていた時だった。

？「その人！大丈夫ですか！？」

智樹「ん？」

人の声に振り返ると、そこにはオレンジ色の髪をツインテールにして、両手に銃を持った女の子と、青いボーイッシュな髪をしてハチマキ、ガントレッド、ローラーブレードを着けた女の子がこちらを向いていた。

？「怪我人ですか・・・って何コレ・・・ガジエットの残骸！
？・・・もしかしてコレはあなたが・・・？」

オレンジ色の髪をしたツインテールの女の子は俺に聞く。

智樹「あはは・・・え、え」と・・・。

そんな風に困っているとふと視線を感じてその方を向く。そこには先ほどの青い色のボーイッシュな髪をした女の子が呆然といった感じで俺を見ていた。

？「ウソ・・・！もしかして・・・！」

智樹「？」

？「もしかしてトモキお兄ちゃん！？」

智樹「え、何で俺の・・・ッ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

？『本当にありがとう！トモキお兄ちゃん！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

智樹「ま、ましか！」

スバル「はい！あの時助けて頂いたスバル・ナガシマです！」

智樹「え、ええええええ！？」

満点の星空の下、こうして俺たちは再開を果たした。そして思えばこれが全ての始まりだったんだ……。

二話・了

「二話」全裸王（ともき）、ミッドに立つー!」（後書き）

第二話、ということだね・・・、ありがとうございます皆様！m

（――）m

まさか半日で1000hit越えとは・・・！色々感慨深い感があります。

感想をくれたゼクスさん、ありがとうございます。お気に入り登録をしていただいた皆様、ありがとうございます。

今後とも頑張っていきたいと思っています！ではまた次回！

次回！ピンチ！？機動六課！？
じようせいくわん

三話「ピンチ!?機動六課(じよせいじん)!?」(前書き)

アレ?前日のアクセス数・・・1,639hit!?・・・ス
ゲーーヨ、プレッシャー半端ネエよ・・・!

三話「ピンチ！？機動六課（じょせいじん）！？」

sideスバル

アタシとティアはガジェットの大群がミッドに現れたという通報のために一路、ミッドのビル街を目指していた。

ティア「また爆発・・・？近いわ、急ぐわよスバル！」

スバル「分かった！ティア！」

そうして進んでいくとガジェットの残骸の前に佇んでいる男の子と、怪我をしているのか、寝かせられている羽を生やした？女の子がいた。

ティア「その人！大丈夫ですか！？」

ティアが話し掛ける。どうやらあちらも気付いたようだ。・・・あれ？あの人・・・？

ティア「怪我人ですか・・・って何コレ・・・？ガジェットの残骸・・・！？・・・もしかしてコレはあなたが・・・！？」

？「あはは・・・え、え〜と・・・。」

間違いない。声も、姿も、雰囲気も！あの人だ・・・！あの時の！

？「ん？」

そんな風に呆然としているとあの人も気付いたのか、こちらを見る。
アタシは確認するためにあの時呼んだ呼び方で話す。

スバル「ウソ……もしかして……！もしかしてトモキお兄ちゃん！？」

？「な、何で俺の名ま……ッ！」

トモキお兄ちゃんは最初に驚き、そして気付いたのか、声を詰まらせた。

トモキ「ま、ましか！？」

スバル「はい！あの時助けて頂いたスバル・ナカジマです！」

トモキ「え、ええええええ！？」

満点の星空の下、アタシとトモキお兄ちゃんは再会した。

side 智樹

智樹「ほ、本当にあの時の空港の！？」

俺はスバルちゃんの方を見る。あの時はまだまだ小さかったけれどいつの間にやらこんな大きく……ってアレ？なんか近付いて……？

ガバッ！

モニユ。

智樹「ふげっ!？」

目の前が真っ暗になる。あ、アレ!？な、何だか顔に柔らかいナニカが当たってるんですけどおおおお!？

下【ヨンダッ!？】

智樹「ふよ、ふよんべべえ（よ、呼んでねえ）!」

スバル「良かった……!また会えた……!」

智樹「ふもももっ!？」

スバルちゃんは俺を抱く力を一段と強める。それに比例するように顔がナニカに押し沈められていく。

下【ヨンダダロ!？】

智樹「ふよんべべえ（呼んでねえ）!」

下の俺が騒ぎ立てる。やべえ……!もう……!押さえらんねえ……!と思っていると後ろから声がした。

？「スバル!何やってんのよ!」

スバル「あ、ティア。」

スバルちゃんの手が緩む。た、助かった〜！

？「あじやないわよあじや！その人知ってる人なの？」

スバル「あ、そうだよティア！この人！この人だよアタシを助けてくれたのは！」

？「助けたって・・・あ、もしかしてあんたがよく言ってた空港で助けてくれた男の人？」

スバルちゃんは俺を抱きながら頷く。

？「そうなの・・・。えっととりあえず・・・アナタが桜井智樹さん？」

智樹「あ、ああそうだけど・・・何で俺の名前を？」

？「このバカがよく言ってるのよ・・・。アナタに助けて貰ったって話を。」

テヘヘ・・・とスバルちゃんは少し照れた。

？「で？アナタ、どこの出身？」

智樹「あ、そうだよ！なあ、ここは一体どこなんだ？地球じゃないのは確かだけど・・・。」

？「地球？地球って・・・確か第97管理外世界の事？」

智樹「だ、第きゅ・・・な、何だって？」

聞き慣れない話に俺は戸惑う。すると彼女たちは顔を見合わせて頷く。

スバル「ティア、もしかして……。」

？「うん、この人たちは時空漂流者ね。」

智樹「時空漂流者？」

俺が聞き返そうとすると上から声がする。

？「スバルー！ティアナー！」

『なのはさん！』

俺が振り返るとそこには栗毛色の髪をツインテールにし、白を基調に青があしらわれた服を着て、手には杖のようなものを持った美女が空に浮かんでいた。

？「良かった、二人とも無事でってアレ？この子は？」

こちらに降りてきたのはと呼ばれた美女は俺の方を向いて言う。

？「なのはさん、この人たち時空漂流者みたいです。」

スバル「それに！この人がアタシが話してた空港で助けてくれた人なんです！」

？「え？じゃあもしかしてあの時突然消えたあの子！？」

何故だか皆驚いている。俺がそうしているとなのはさん？が俺に話しかけてきた。

なのは？「今晩は、私は時空管理局機動六課所属スターズ小隊隊長、高町なのは一等空尉です♪」

智樹「ッ！あ、はいっ！俺は桜井智樹ッス！」

なのは「智樹君か・・・。」

智樹「あの～さっきから聞いてたんですがここって地球じゃないんですか？」

なのは「ここはミッドチルダなんだけど・・・うん、ここじゃ立ち話も何だしちょっと私たちについて来てくれない？」

智樹「いいつスけど・・・どこへ？」

なのは「私たちの職場の機動六課までだよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

はい、ということで後から来たヘリにイカロス共々乗せられた俺が連れてこられたのは海辺にそびえ立った綺麗な建物・・・なのはさんが言った機動六課だった。で、イカロスは医務室に連れてかれ

て俺はなのはさんに連れられて「部隊長室」と書かれた部屋の前に来ていた。

なのは「八神部隊長、入ります。」

プシュー、と近未来的な音とともにドアが開き俺は中に入る。

なのは「八神部隊長、現場にいた少年に来て「待った。」「？」

？「そんなにかしまらんでもええよなのはちゃん、何時も通り何時も通り。」

なのは「・・・分かったよはやてちゃん、現場にいた少年・・・桜井君に来て貰ったよ、はやてちゃん」

デスクに座っていたこれまた美女はなのはさんにそう言いこちらを向く。

？「初めましてやね、私は時空管理局機動六課部隊長の八神はやてっていうんよ。よろしくな、え〜っと・・・。」

智樹「あ、智樹っす。桜井智樹です。」

はやて「そうか、智樹君か！よろしゅうな智樹君！」

智樹「あ、はい八神さ「はやてでええよ？」あ、えっとは、はやて。」

そう言うとはやてはよしよしといった感じに微笑んだ。そうしているとなのはさんが話を切り出す。

なのは「はやてちゃん、桜井君はどうも時空漂流者みたいなの。」

はやての顔が変わる。俺は折からの疑問をぶつけてみた。

智樹「えっと……はやて、ここって地球じゃないのか？後管理局とかって何？」

はやて「地球やって？うーん、じゃあ桜井君、君の出身地ってわかるん？」

智樹「えっと……空美町、福岡の。」

そう言うとはやては自身のデスクの上の物をタッチして空中にスクリーンを呼び出す。

はやて「グリフィス君、グリフィス君。」

？『はい、何でしょう八神二佐？』

はやて「第97管理外世界の日本の福岡エリアに空美町という町があるか調べてくれへん？」

？『はい、第97管理外世界、日本、福岡エリア、空美町ですね？』

男性の声が響く、俺が顔に疑問符を浮かべていると隣のなのはさんは言う。

なのは「この声の人はグリフィス君、って言ってレティ・ロウラン提督の息子さんなんだ。」

智樹「レティ・ロウラン提督？誰それ？」

なのは「レティ提督はね……『八神二佐、検索終わりました。』
つと……。」

はやて「ありがとさん、で、結果は？」

グリフィス『結論から言うと……第97管理外世界の日本の福岡エリアに空美町という地名の場所は存在しません。……宇美町という地名の場所ならありましたが……。』

はやて「……そうか、ご苦労さんな、グリフィス君。」

グリフィス『いいえ、では。』

画面が消え、はやては俺の方に向き返る。

智樹「……地名がないって……？」

はやて「……そのことなんやけど……多分、ウチらが確認しとる地球……ウチとなのはちゃんのご郷の地球は智樹君が住んでた場所とは違う、ってことなんよ。」

智樹「つまりはやてたちが確認してる地球は俺が住んでた地球とは違う、てことか？」

俺がそう言うとはやてとなのはさんは少し面食らった顔をしながらも頷き、話を続ける。

はやて「なんや意外に理解が早いなあ．．．．！」

智樹「．．．．まあ色々あつたからなあ．．．．。」

まあ空から女の子が落ちてきてそれからニンフやらバカ（あすどれあ）が増えたりシナプスから命さえ狙われる経験とかすりゃあなあ．．．．。

なのは「い、色々と大変だったみたいだね．．．．。」

遠い目でどこか彼方を見つける俺になのはさんは同情の目を向けられる。

智樹「で？管理局ってなによ？」

はやて「ああそれはやな．．．．。」

俺ははやてからこの世界の説明を受ける。どうやらこの世界、ミッドチルダでは魔法が発達していて、管理局というのは他の次元世界の魔法文化を持っている世界を”管理”している組織らしい．．．．。そこまで聞いた所で、後ろのドアがいきなり開いた。

side はやて

智樹君にウチらの事を説明して次は智樹君たちの世界の事を話してもらおうかと思っていると、ドアが開き、シャマルにシャーリー、シグナム、ヴィータと後羽？を生やした赤い髪の女の子がおった。

智樹「イカロス！？大丈夫なのか！？」

智樹君がその女の子に声をかける。その女の子・・・イカロスっていうんかいな？まあイカロスちゃんも智樹君に軽く頷きながら智樹君に向かって話す。

イカロス「はい・・・マスター・・・。魔法、というのでしょ
うか・・・この方がかけてくれた魔法？で傷は完全に塞がってしま
いました・・・。」

智樹「そっか・・・！良かった・・・！」

智樹君はイカロスがこの方と言った人物、シャマルに向き直り、

智樹「イカロス治してくれてありがとうございます！」

シャマル「良いのよ、お礼ならこの子・・・クラールヴィントに
言って挙げて？」

クラールヴィント『お気になさらず。』

はやて「で、シャーリーたちは何の用かいな？」

シャーリー「あ、そうそう、そうですよ八神二佐！」

シャーリーが前に来て智樹君に近付いていく。

智樹「へ？な、何でしょうか！？」

シャーリー「アナタがこの子のマスター！？」

そう言いシャーリーは智樹君の前に一枚のカードを出す。

智樹「あ、さっきの。」

はやて「どうしたん？シャーリー？」

シャーリーはこちらに向き直り、話し始める。

シャーリー「実は先ほどの出勤の時にスターズたち……スバルたちが現場に到着する前にガジェットが破壊されていたじゃないですか。」

はやて「ああ、そんな報告があつたなあ。」

シャーリー「で、その現場の近くにあつたサーチャーの記録を漁ってたんですけど……。」

そう言いシャーリーは端末を取り出して空中に巨大なスクリーンを出す。そのスクリーンに映し出された映像は……。

……

？『御意！トリニティスター！出陣！』

智樹『な、何じゃこりやあああああ！？』

？『シエルブリットバースト……！』

？『衝撃のお！ファーストブリットオオオオツ！』

ドカーンッ！

・・・・・・・・・・・・・・・・

はやて「こ、これは・・・・！」

そこには右腕に装甲と背中にフィンをつけた智樹君、というより右腕がガジェットを破壊している光景が映っていた。

シグナム「これは・・・・！」

ヴィータ「スゲエ・・・・！」

シグナムとヴィータが感嘆の声を上げる。

シャーリー「で、このトモキさんから預かった荷物のこのカードを調べて一枚はこんな感じの装置に変わったんですけど、このカードだけは何にも反応しないし、解析すら受け付けないですよ！」

智樹君がカードを受け取る。すると、

？『ふゝ漸く親方様の元にたどり着くことができ申した！』

なのは「しゃ、喋った！？」

カードから声がする。まるでデバイスやな・・・・。

シャーリー「やっぱり！まるでデバイスみたい・・・・！」

？『はっ！ソイツはちよつとちげえなあ！嬢ちゃんよお！』

シャーリー「！？」

？『こら、シエル。すみません、皆さん。私の名前はトリニティスター。マスター智樹のあなた達で言うところのデバイスです。気軽に、スターとでもお呼び下さい。』

はやて「じゃあスター。あの姿は何なの？」

スター『アレは私のモードの一つ、シエルブリットモードです。』

シグナム「シエルブリットモード？」

スター『シエルブリットモードとはマスターの右腕を強化、背中のフィンで推進力を強化した形態で格闘に優れたAIに私のメインに変更したモードであります。』

シャーリー「すごい……！そんな発想があるなんて……！」

はやて「智樹君、こんなすごいのでこで手に入れたん？」

智樹「え、えつと。」

智樹君は目を泳がしている。するとイカロスちゃんが智樹君の前に出てくる。

イカロス「それは多分……マスターの思いから生まれたんだと思います……。」

はやて「どういう事やの？」

ウチらはイカロスちゃんの説明を聞く。イカロスちゃんがエンジエロイドという存在である事、シナプスというイカロスちゃんを作った存在の事、そして今智樹君がマスターになっているという事、そして最後にそのカードの事について話した。

イカロス「私がマスターに預けた二枚のカードのうち一枚は転送装置のカード、もう一枚はマスターの思いに応えるカードなんです・・・。」

はやて「つまりは智樹君がイカロスちゃんを助けたい、って思いがスターを生み出したってことなん？」

イカロス「そういうことだと思われます・・・。」

（うーん、イカロスちゃんは全身が質量兵器みたいなもんやし・・・
・智樹君のデバイス共々ほついたら色々とマズい気がするし・・・
・ん？そうや！）

ウチはある事を思いつき、智樹君に話し始める。

はやて「智樹君！ウチらに協力してくれへん？」

智樹「へ？協力？」

はやて「ウチらはロストログアってもんを探したりしてる仕事をしてるんやけど・・・、なにぶん人手が足りなくて、ウチらも困ってるんよ。だからお願い！ウチらの仕事を手伝ってくれへん？勿論

三話「ピンチ！？機動六課（じよせいじん）！？」（後書き）

という事で第三話。ほんととはもつとエロ分を入れたかったんだけど
なあ・・・というのが本音です（笑）
さて、これからどうなるのか、次回をお楽しみに！

次回・・・ロリと剣士と模擬戦・・・、お楽しみに・・・。

四話「ロリと剣士と模擬戦（りへんいじ）」（前書き）

四話！長いです！暴走してます！ではどうぞ！

四話「ロリと剣士と模擬戦（りくせんじく）」

sideはやて

智樹「……ヤダ。」

はやて「……へ？」

『ええええええええええ！？』

ウチらは六課じゅうに響く程の声で仲良く叫んだ。

ヴィータ「断るのかよ！何でだよ！」

智樹「だって仕事っていうのはあのガジェット……だったけど？
まああのロボットと戦うこともはいんだろ？」

ヴィータ「む……。」

智樹「俺のモットーは平和が一番！流石にいい話でもコレばかりは譲りたくない、つか異世界に來ただけでも平和が乱されんのにさらに平和を乱す真似はしたくねえ。」

全員『むむむ……！』

ウチらは智樹君の正論に引き下がる。どうしようかと思つとるとシグナムから念話が入る。

シグナム「主はやて、ここで彼らを手放しては……。」

はやて「そうや、確実に本部や上の人らに見つけられて、保護と称して別の手の届かへんところに連れてかれてまう！そうなる前にウチらの手元に置いとくかへんと最悪智樹君たちが元居た智樹君らの地球に帰れへんくなつてまう……！ってシグナム？何身体を悶えてん？」

見るとシグナムは何かを言いたそうにそわそわしてる。

シグナム「い、いいえ！？べ、別に先ほどの映像を見て戦いたくなつたとか、決してそのようなことではないのですが……！」

はやて「……………。」

シグナム「ああ！あ、主！そんなまたやねシグナムみたいな雰囲気
の沈黙をしないで下さい！」

やれやれ……シグナムの戦闘狂にも困つたもんやね……
思っているとまたドアが開く。入ってきたのは……

フェイト「はやて、今日のレリック回収の報告書持つて来たよ……
・って、取り込み中？」

フェイトちゃんやった。

なのは「フェイトちゃん、実はさっきスバルたちと向かつた現場で
この二人……桜井智樹君とイカロスちゃんがいたから来て貰つ
て話を聞いてたところだったんだけど……。」

智樹「桜井智樹です！」

イカロス「……イカロスです……。」

フェイト「あ、あはは……。私はフェイト・T・ハラウン、時空管理局機動六課所属の執務官でライティング分隊の隊長をしています。よろしくね。」

智樹「はいッ！よろしくお願いしますフェイトさん！」

フェイト「あはは……。フェイトでもいいよ。」

智樹君のテンションに若干引きながらもフェイトちゃんは二人と握手をする。……ってアレ？智樹君のテンションが高い？

(……はっ！？まさか……。智樹君って……。！)

ウチは智樹君の視線の先を見る。智樹君が見とるのは……。！

はやて「そっや……。コレや！」

シグナム「い、いかなされましたか主はやて！？」

はやて「……。シグナム、智樹君と戦う術を思いついたで！」

シグナム「ッ！？ほ、本当ですか主！？」

はやて「ああ、十中八九、いや確実に智樹君は乗ってくる！」

シグナム「そ、その術とは……！」

はやて「それはやな……！」

side 智樹

まさかこんな異世界来たときは思っても見なかったよ……！こんな美人が、金髪で可愛くて巨乳という素晴らしい美女がいるなんて……！どっかの殺人チョップしてくるアイツにも見習って欲しいくらいの優しさだし……！

はやて「智樹君！ちよつとええ！？」

智樹「ん？何だよはやて？」

そんな風に考えているとはやてが俺に話しかける。

はやて「ここのシグナムが話があるんやって。」

智樹「話？」

俺がそう言いながらはやてが指差している方を向くと、そこにはピンク色の髪をポニーテールに纏め、鋭い目をした……これまた巨乳の女性がいた。

シグナム「初めましてだな、私はテストロッサと同じ、ライトニング分隊の副隊長、シグナムだ。」

智樹「あ、はい。で、話つて……?」

シグナム「ああ、実は……!」

智樹「実は?」

シグナムさんは一拍おいて話す。

シグナム「私と勝負をしてくれないか!」

……

智樹「……へ?」

俺は呆然と立ち尽くす。

シグナム「……聞こえなかったか?頼む!私と勝負」いやいや
聞こえてるけど!」

智樹「何で俺と!」

シグナムさんは俺の方に向き直る。その向き直る瞬間、その胸が揺れる。

下【ヨンダツ!】

智樹「呼んでねえ!」

シグナム「どうかしたのか?」

智樹「い、いやっ！な、何でもない！……で、何で俺となんだ？」

シグナム「何でも何も、私はお前のデバイス……スターといったか？スターと我が剣、レヴァンティン……どちらか強いが、試してみたいのだ！」

スター「おっ！姉さんなかなか強そうじゃねえか……！智樹！俺にやらせる！」

スターまでもが言う。

智樹「ふざけんじゃねえ！オイコラスター！お前自分で俺のことマスターとか言つときながら何なんだよその態度！？」

スター「お、落ち着かれて下され親方様！こらシエル！」

智樹「大体俺のモットー聞いてたか！？俺のモットーは「平和が一番」だそ！？「平和が一番」！わざわざ平和を乱すようなことなんて出来つか！」

スター「なにこのただのマスターの癖に！」

智樹「なんだとおっ！」

スターと俺は睨み合う。するとはやてが会話に加わる。

はやて「うーんそうか……さっき勝った方が何でも好きなようにさせる事が出来る勝利特典の了承とつといたんやけどなあ……。」

ピクッ！

智樹「・・・・・・・・・・好きに出来るだど！？」

スター『お、オイ智樹？』

（好きに出来る・・・・・・・・それって。。。。とか。。。。とか。。。。もし放題！？ぐへ、グへへへへッ！）

智樹「その勝負！乗った！」

はやて「よっしゃ、じゃあ今日は遅いし、智樹君たちには部屋を貸すから明日の朝に開始な」

智樹・シグナム『望むところだ（ぜ）！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

sideスバル

アタシはあの再会の夜から一夜明けた翌日、訓練の為にティアとライティング・・・・・・・・エリオとキャロと一緒に訓練スペースに向かった。

そしてそこにはすでになのはさん、フェイトさん、シャーリーさん、

さらには八神部隊長が居た。

はやて「や、みんなお早うさんな!」

なのは「みんなおはよう」

フェイト「おはよう、みんな」

『部隊長!?!なのはさんフェイトさん!?!お、おはようございます!?!』

はやて「そんなにガチガチにならんでもええよ?」

ティア「え、じゃあ・・・何で八神部隊長はここに?」

はやて「ああ、それはやな・・・シャーリー!」

シャーリー「はい!八神二佐!」

そう言い、シャーリーさんは空中にスクリーンを出す。そこに移っていたのは・・・!

スバル「ト、トモキお兄ちゃん!?!」

ティア「ヴィ、ヴィータ副隊長!?!」

エリオ・キャロ「シ、シグナム副隊長!?!」

そこにはシグナム副隊長、ヴィータ副隊長、そして何故だかトモキお兄ちゃんが模擬戦用のヴァーチャルスペースに立っていた。

.....

side 智樹

智樹です。さてなんでシグナムさん以外にあの子どもがいるかというところ……

翌日、スバルたち到着の数分前……

はやて「お早うさん、智樹君、イカロスちゃん。よく眠れたかいな？」

智樹「おかげさまでな、ありがとう。」

はやて「ええよええよ。」

？「はやて〜！」

声がする。見ると前日の部隊長室にいた後ろで髪を二つのおさげにした小さな女の子が歩いてきた。

はやて「おお、ヴィータどうしたん？」

ヴィータ「なのはたちがヴァーチャルスペースの準備は出来たっさ。」

はやて「おお、そうか。ありがとなヴィータ。」

そう言いはやてはヴィータの頭を撫でる。

智樹「なあはやて。」

はやて「ん？なんや智樹君？」

智樹「昨日からいるこの子って何処の子どもなんだ？」

そう言うとプツンと何かが切れる音がする。見るとそのおさげの子が身を震わせている。

ヴィータ「アタシは……！」

智樹「ん？」

ヴィータ「アタシは子どもじゃねええええつ！」

智樹「おわあっ！？何だよいきなり！？」

そのおさげロリ少女……。ヴィータはいきなりどこからかハンマーを出し、俺に振りかざしてきたので俺は全力で避ける。

ヴィータ「アタシは少なくともお前よりは年上だ！」

智樹「うっそだあ！」

ヴィータ「ウソじゃねえよッ！」

智樹「おわあっ！？だからハンマーを振り回すのは止めてっておわあっ！？」

ヴィータは俺に向かって何度もハンマーを振り回す。それを避けているとまた後ろから声がする。

？「はやてちゃん、遅いけどどうしたですかって何をやっているんですかヴィータちゃん！？」

ヴィータ「あ、リイン。」

俺が振り返るとそこには蒼い長髪の妖精がいた。

智樹「な、何じゃこの子！？妖精か！？」

？「む！リインは妖精なのではないのですよー！」

はやて「まあまあリイン。智樹君、この子が私のユニゾンデバイス、リインフォースツヴァイヤ。リインって呼んだってや。」

リイン「リインですう、よろしくです桜井智樹さん。」

智樹「よ、よろしく……っておわあっ！？またかちびつ子！？」

ヴィータ「ちびつ子じゃねえ！……よし、決めた！アタシもおまえと戦う！」

智樹「ってオイ！なんで俺引つ張られてんだよ！？っーかはやて！この子止めるよー！？」

俺はヴィータにズルズルと首もとを引っ張られて連れていかれる。

はやて「まーしゃあないなあ、相手してやってや?」

智樹「裏切り者おおおおっ!?!」

.....

と、いう訳で今に至る。

はやて「え〜じゃあ今から模擬戦を始めるで!」

俺は内心ビクビクしている。目的の為とは言え相手が相手だ。そんなこんなで考えているとスターが話しかける。

スター「マスター、そんなに緊張しないで下さい。」

智樹「へ?」

スター「マスターは私がサポートします。だから、あなたは私を信頼して下さい。」

智樹「スター・・・!」

スター「あなたの信頼が私の力になり、私の力はマスターの力となります。だから、信じて下さい。私と、あなたの力を・・・!」

智樹「……………分かった！」

はやて『……………ということではルールは簡単、相手を気絶させるか戦闘不能にした方の勝ちや！みんなええな？』

シグナム「はい！」

ヴィータ「分かった！」

智樹「オッケー！」

はやて『では……………開始や！』

sideスバル

シグナム・ヴィータ『レヴァンティン（グラーフアイゼン）！、セツトアップ！』

シグナム副隊長とヴィータ副隊長がそれぞれのバリアジャケットを展開する。

一方トモキお兄ちゃんは一枚のカードを取り出し、空に掲げ叫ぶ。

智樹『トリニティスター！シエルブリットモード！オン！！』

？『おっしやあ！いくぜえ！』

そう言つと光があふれ、トモキお兄ちゃんがその光に包まれる。

スバル「うわっ!？」

その光が晴れ、トモキお兄ちゃんの姿が現れるがそこにいたトモキお兄ちゃんはさつきと別の格好をしていた。

白をベースに青があしらわれた服の上に黒いジャケット、頭には赤いハチマキを着けて右腕に装甲、背中に何かをつけた格好のトモキお兄ちゃんはシグナム副隊長とヴィータ副隊長に身構える。

?「さあケンカだケンカ!派手にやろうぜッ!」

ティア「なにアレ……!」

エリオ・キャロ「か、カッコいい……!」

スバル「……スッゴい!」

シグナム「ふふふ……!そうだ……!これと戦いたかった!」

シグナム副隊長とヴィータ副隊長はトモキお兄ちゃんへと向かっていった。

side 智樹

シエル「いくぜえ!衝撃のおッ!ファーストブリットおッ!」

シエルがブーストをかけ、向かって来るシグナムさんとちびっ子に拳を向け突撃する。

シグナム「くっ！」

ガキイツ！

シエルとシグナムさんの剣、レヴァンティンが交差する。

ヴィータ「アイゼン！」

グラーフアイゼン『jawohl! Explosion!』

ちびっ子がそう言うときちびっ子が持っているハンマーから薬莢のようなものが飛び出し、ハンマーの後ろからブーストがかかる。

ヴィータ「うおりゃああああっ！」

そのままちびっ子は俺に向かって来る！

智樹「おわああああ『ちっ！』ッ!?!」

ガキキキキキキッ！

ヴィータ「なっ!?!」

智樹「え?」

シグナム「何!?!」

俺が閉じていた目を開くとそこには七色の輝きを持った壁？がちびつ子のハンマーの攻撃を防いでいた。

シエル『たく……！面倒かけさせやがって……！』

智樹「ッ！お前かシエル！？」

俺が聞くとシエルは腕を動かしシグナムさんのレヴァンティンを弾き、ちびつ子とシグナムさんとの距離をブーストで一気に広げ話す。

シエル『ああ、あんまりにもお前が鈍くさいんだな。』

智樹「お前なあっ！……ってまあいいか、ありがとなシエル。」

シエル『ふんっ……！それより、またやるぞ！』

智樹「ああ！」

俺たちはまた向かっていく。

sideグイータ

何なんだアイツ……！

（……映像を見た時も只者じゃねって思ってたけど……あのプロテクション、ユーノ並に硬かった……！）

スター『オラアアアアッ!』

ヴィータ「ッ!？」

グラーファイゼン『防御、展開!』

アイゼンがプロテクションを張る。

スター『があああああッ!』

ヴィータ「くっ……!？う、ウワアアアッ!？」

プロテクションがスターの拳に耐えきらずに破れアタシは吹っ飛ばされた。

ガシッ!

シグナム「大丈夫かヴィータ!？」

ヴィータ「あ、ああ……。ごめんシグナム……。」

後ろに吹っ飛ばされたアタシをシグナムを掴む。

シグナム「気にするな、それより……。!」

ヴィータ「……アイツ、アイゼンのプロテクションを突き破りやがった……。!」

シグナム「ああ、これは本気を出さないと少々危ないかもな……」

「！」

レヴァンティン『ja!』^{はい}

シグナムはレヴァンティンを構えなおす。アタシは手の中のグラフアイゼンを見つめる。するとアイゼンが話す。

アイゼン『主よ。』

ヴィータ「アイゼン？」

アイゼン『貴公はそんな簡単に諦めるのか？』

ヴィータ「ッ！そんな訳ないだろ！そんな簡単に諦めたら鉄槌の騎士の名が廃るってもんだ！」

アイゼン『ならば共に行こう、”鉄の伯爵”の主よ！』

ヴィータ「ああ！」

そうしてアタシはまたシグナムと共に向かっていく。

sideはやて

ヴィータ『ウワアアアッ!?!?』

『えっ!?!?』

なのは「ヴィータちゃんのプロテクションが破られた!?!?」

フェイト「それにヴィータの攻撃を防いだあのプロテクション・・・
・ユーノ並の硬さだよ!」

スバル「スッゴい!すごいよトモキお兄ちゃん!」

ティア「・・・・・・・・ツ!」

エリオ・キャロ『カッコいい・・・・・・・・!（目を輝かせている。）
』

シャーリー「これは・・・・・・・・!?八神二佐!」

各々がそれぞれの感想を言っているとシャーリーがウチに話しかける。

はやて「どうしたんや!シャーリー!?!」

シャーリー「実は・・・・・・・・!先ほどのトモキさんの攻撃ですが・・・
・魔力反応が無いんです!」

『ええっ!?!』

はやて「何やて!?!」

ウチはスクリーンの方に向き直る。

（智樹君の持ったカードを作ったシナプス・・・・・・・・!一体何者
なんや・・・・・・・・!）

スター『うおおおおつ！』

シグナム『ハアアアアツ！』

ヴィータ『うおりゃあああつ！』

三者はなおも戦い続けていた……。

side 智樹

シグナム「仕方ない……！レヴァンティン！」

レヴァンティン『ja! Explosion!』

何度となく切り結び、お互いに離れた俺とシグナムさんだったが、そこで離れたシグナムさんは先ほどちびっ子がやったように叫ぶと、レヴァンティンから何発かの薬莢が飛び出した。

レヴァンティン『schlange—form!』

レヴァンティンから音声の流れ、シグナムさんが剣を振ると剣が細かく分かれ、蛇のように唸る。それはまるで龍のようだった。

智樹「げえっ！？何それ！？」

シグナム「まさかコレを使うことになるとはな……！貴様に感謝するぞ、スター、桜井！」

シエル『良いねえ．．．！いい目だ！お前、名前は？』

シグナム「夜天の主がヴォルケンリッター、烈火の将、シグナム。そしてその剣、”炎の魔剣”レヴァンティン！」

シエル『そうか．．．！刻んだぜ！シグナム！レヴァンティン！だから今度は俺たちの名を刻め！トリニティスター、シエルブリットとそのマスター、桜井智樹の名をよ！』

シグナム「そうか．．．！ならば刻もう！シエルブリット．．．！桜井！」

シグナムさんは身構え、シエルも構える。．．．なんか俺蚊帳の外だな．．．。

．．．．．

沈黙が二人を包む、ちびっ子も息を吞んでいるようだ。

シグナム・シエル『ッ！』

二人が同時に動く。

シエル『撃滅のおおおっ！』

シグナム「飛龍．．．．．！」

シエル『セカンドブリットオオオ！』

シグナム「一閃ッ！」

瞬間、光が溢れる。

ガキキキキキキッ！

シグナム「ハアアアアッ！」

シエル『うおおおおおっ！』

ガキキキキキキッ！

ガキッ！

シエル『ぐっ！』

智樹「お、おわああああっ！？」

ドコーンッ！

sideシグナム

シグナム「はあっ……！はあっ……！はあっ……！」

や……ったのか……？

目の前の廃ビルからモウモウと煙が立ち込める。恐らく桜井とシエルブリットはアソコに飛ばされた筈だ……！

ヴィータ「シグナム！」

シグナム「待てヴィータ！……私が見てくる、頼んだぞ。」

ヴィータ「……分かった。」

後ろから来たヴィータを留まらせ、私は廃ビルの中に入る。

（……何処だ……？）

周りはまだ煙が立ち込めており、なかなか見えない。そうした中奥に進んで行くと……！

ガシッ！

シグナム「ッ！？」

いきなり現れた腕がレヴァンティンごと私の腕を掴む。目の前の霧が晴れるとそこには……！

シエルブリット『はあゝい！捕まえたあゝ』

シグナム「やはりな……！」

桜井「ゲホッ！ゲホッ！苦勞しましたよ……こっちもこっちで探すのにね！」

シグナム「くっ！」

腕を振り解こうとするがなかなか離れない。

シグナム「くううつ！」

シエルブリット『離すかよおおおッ！』

シグナム「くううつ！うわっ！？」

桜井「ぬあっ！？」

そうしていると、お互いにバランスを崩し倒れる。

モニユ。

シグナム「つう……！はっ！？」

私は自分の胸が桜井の頭に当たっているのに気づく。

シグナム「す、すまん桜井！すぐど……ッ！？」

その瞬間、背筋が凍る感じがした……。

side
智樹

（ああ……このまま負けようか……！）

シグナムさんの圧倒的乳圧に気絶しようとしていた時だった。

【……も坊……。】

(だ、誰だ……?この声……どこかで……。)

【智坊……!】

(じ、じいちゃん……!?)

……

じいちゃん『いいか智坊、じつちゃんの言うことさよー聞け?』

いつか……いつかじいちゃんが話してくれた話が想い出されていく。

じいちゃん『男にはな……何時も欲望が溢れておる。じつちゃんが世界中のおなごねんごろになりたいようにの。』

じいちゃんは夕日に暮れる土手の上で子供の頃の俺に言う。

じいちゃん『じゃがな……普段は男たちはその欲望を隠して生きておる、社会で生きるとはそう言うことなのじゃ……!』

智坊『じいちゃん……。』

じいちゃん『じゃがな智坊、男はいざ目の前にある欲望に手を伸ばさなければ男でなくなるんじゃ……!だから智坊、お前は欲望のままに生きるのじゃ……。ええな……。?』

・・・・・・・・・・・・・・・・

（じいちゃん・・・分かったよ・・・！）

智樹「良いんだね・・・！」

俺はかつてアストレアを倒した”あの技”の封印を解くことにした・
・・・！

side シグナム

桜井「良いんだね・・・！」

シグナム「な、何なんだアレは・・・！？」

桜井の身体が浮き、後ろに様々な仏が書かれた絵が浮かび上がる。

桜井『六道！それは人が死んで行くという地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、そして天道！そこで人は前世の罪を裁かれ、生まれ変わるといふ！』

シグナム「な、何なのだ！？」

シエルブリット『と、智樹！？』

桜井『かつて禅寺で生み出した飛奥義！コイツで六道輪廻までご案内

内！』

ゴゴゴゴッ！

シグナム「な、何！？」

下から巨大な手が現れ、私を包む。

シグナム「ウ、ウワアアアッ！？」

桜井『必殺！智樹六道地獄へようこそ！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

『智樹！地獄道！』

シグナム「な、何をするのだ！？」

私は桜井からお湯責めに遭う。

『智樹！餓鬼道！』

シグナム「な、そんな所を触るなあっ！？／／／／」

そして小さい桜井たちに襲いかかれ・・・

『智樹！畜生道お！』

シグナム「そんな所を舐めるなあっ！？／／／／」

犬の姿をした桜井たちが私を舐めまくり・・・

『智樹！修羅道おおおっ！』

シグナム「ひゃああっ！？／／／／／」

騎士甲冑を切り裂かれる。

シグナム「一体何なのだ此処は！？／／／／／」

騎士甲冑を直すのも忘れて暗闇を走っていると光が見える。

シグナム「出口か・・・！」

私はそこに急ぐが、近づくにつれ、人影が見える。それは・・・！

シグナム「はう・・・！あ・・・！」

桜井『ようこそ、人間界へ・・・！』

全裸の桜井だった。そのまま光が辺り一面を照らし・・・！

桜井『ほくらみてごらん♪』

下【ヨンダッ！？】

シグナム『な、何なのだソレは！？／／／／／』

桜井『これが天道だ・・・』

シグナム「も、もうイヤアアアッ!」

ヴィータ「シグナムになにしてんだあああッ!／／／／／」

side 智樹

ヴィータ「シグナムになにしてんだあああッ!／／／／／」

突然の声に、振り向いた時にはすでに遅く、

智樹「ほでゅっ!」

無常にもちびっ子のハンマーが俺の”アレ”に叩きつけられ・・・
!

キーン!キーン・・・!キーン・・・!キーン!キーン!キーン!

「I can hear my heart beat ぶっぶっ
たつていうの、俺のベルがなるう」

ドサアッ!

・・・

シエル『・・・しよ、勝者シグナム・ちびっ子ペア・・・

・。
□

四話・了

四話「ロリと剣士と模擬戦（りくどいじく）」（後書き）

はい、四話・了ということだね……。なんかごめん……。

暴走し過ぎた……。OTL

まあとりあえずこれで智樹が機動六課入りすることになりますが・
・どうしよう？魔王イベントの為にティアナは劣等感を抱いた状態にしとくか・・・それともアグスタまでの間に話を入れてツツコミ（そはらの代役）にするか・・・どっちがいいと思う？
まあそんな第四話でした！次回もお楽しみに！

次回！訓練はお楽しみ！？
のち

デバイス設定（前書き）

ネタバレがあります！本編で見たい！という人は戻られて下さい。

デバイス設定

トリニティスター ; CV保志総一郎

イカロスのカードが智樹のイカロスを助けたいという思いに反応して変化、生み出されたデバイス。

状況に応じてそれぞれ近、中、長距離戦闘用のモードにタイプをチェンジすることが可能。またその場合、それぞれの管制に適したAIにメイン管制が変わるため、性格がコロコロ変わる。バリアジャケットは着ているものの上に白を基調に青があしらわれた服に右側の袖が無く、左側に鱗のようなものがついた黒いジャケットを着て、そして頭に赤いハチマキを巻いた感じ。待機状態はいつものカード型。

近距離戦闘用

シエルブリットモード

近接格闘に優れ、パワー、スピードに特化したモード。このモードの場合、智樹の右腕に格闘用装甲、背中に回転型ブリストフィンが装備される。

このモードのAIは喧嘩っ早く、強い人物を見つけるとすぐ智樹を差し置いてでも戦いたがるので智樹からは少しうざがられている。皆からの愛称はシエル。

戦闘に置いては、自身が戦いたいと思う人物に真っ直ぐ突っ込んでいくタイプ。その為しばしば智樹が引っ張られていくという光景が見られる。しかし、マスターである智樹には配慮か、身体強化の術式と、強固なプロテクションをかけたりにしている。

魔力というより周りの物質を吸収して動力源としており、装甲が破

壊されても周りの物質を再吸収することで再生が可能である。必殺技は腕の装甲を展開し、周りの物質を吸収、ブーストフィンにより加速し対象を殴りつけ倒す《衝撃のファーストブリット》、二発目の《撃滅のセカンドブリット》、三発目の《抹殺のファイナルブリット》等、名前は変わるが基本的には同じ技。また、《シエルブリットバースト》により性能を飛躍的に上げる事も可能である。

中距離戦闘用

天覇絶槍モード

二対の三矛型の槍《幸村》と《真田》を装備したモード。

このモードは一撃の突貫力に優れ、好守走ともにバランスの良いモードである。

このモードのAIは忠義心にあふれ、智樹の事を親方様と呼び慕う。
一人称は其。それがし

また、少々熱血過ぎる点があり、暴走することもしばしば。

戦闘に関しては、智樹の身体強化、防御強化、戦術誘導を一手に引き受ける。また、突貫力に長けており、『紅い弾丸』の異名を持つほどの俊敏性、一撃の攻撃力の高さである。

しかし、その熱血過ぎる性格のせい、なかなか止まらなかったり、変な指示をしてしまう事もある。

よくみんなからは槍の二対が『幸村』であることから、『幸村』と呼ばれる。

長距離戦闘用

フリーダムモード

長距離砲撃用に特化したモード。このモードでは、智樹の背中に巨大な高速翼（兼放熱フィン）が装備され、その翼に大出力の魔力砲を放つバラエーナ魔力収束砲が内蔵されている。その他に、腰に連射性に優れたクスイフィアス魔力レール砲、携帯装備であるルプス魔力収束ビームライフルとラルケタ式魔力刃を装備。

圧倒的火力と機動性能を誇るモードである反面、原動力は智樹の魔力なので機動時間の短さに問題があり、まさに最後の切り札であると言える。

AIは冷静沈着で常に智樹をサポートする要を担っている。

戦闘面では機動管制、標準、出力調整を行い、常に智樹をサポートする。なお、このモードでは智樹が戦闘時の最終決定、つまり引き金を引くモードでもあるので、智樹はあまり使うのを躊躇う。

愛称は『フリーダム』である。

デバイス設定（後書き）

ちなみに智樹の魔力ランクはB+という設定です。

五話「訓練（のぞき）は楽しみ！？」（前書き）

皆様お待たせ致しました！では五話、どうぞ！

五話「訓練」のぞき」はお楽しみ!？」

Side 智樹

「……………。(ひたすらに股間を押さえている)」

「只今の勝負、シグナム・ヴィータペアの勝ちや！」

「ヨッシャアッ！」

「大丈夫ですか、マスター…………？」

「……………。(返事がない、只の屍のようだ……………)」

……………そのおとしものStrikers…完……………

「って終わらせんなあッ！」

「あ、起きた。」

天の人の悪意を感じながらも、俺は”アソコ”を押さえながら立ち上がる。俺の下はヤバいことになっていたのだ。

「はゝ痛かったあゝ（泣）」

俺は欲望のままに従い、勝負には勝ったが試合には負けた。その代償がこれだ。

『ったく……！アソコでデメエが暴走しなけりや勝てたのによお……！』

「うるせえ！言つなよ！」

「ま、こちらもちちらでシグナムが再起不能まで叩き落とされてもうたし……、シグナムとはドロー、そしてヴィータには負け、といったところやね。それより……！」

「な、何だよはやて……！」

はやては俺に近づき、顔を近づけた。

「……質問攻めが待つとるで？」

「へ！？」

はやてが顔を退けると一斉に三人の人影が俺の周りを囲んだ。

「スゴイです！何なんですかそのデバイス！？」

「お名前、何と言われるんですか！？」

「スゴイ！スゴイよトモキお兄ちゃん！」

「グアハアー！？」

モニユ。

再び三人の中の一人、スバルちゃんに抱きつかれ、胸が顔に当たる。

【ヨ……ン……ダ……！？】

「ふよんべえ（呼んでねえ）！ふーがふいまはひゃふへ（っーか今は休め）！」

下が潰されても尚、己の使命を果たそうとするが、

「こら、何やってんのよバカスバル！」

ゴチン！

「っうゝ！ヒドゝい！何するのティア！？」

後ろからティアと呼ばれた少女がスバルちゃんの頭を小突き、スバルちゃんの手が頭にいき、俺はスバルちゃんから離れる。

スバルちゃんは頭を押さえながら涙目だ。

「何するのじゃないでしょ全く……！桜井さん潰れかけてるじゃない！」

「ハッ！？ご、ごめんねトモキお兄ちゃん！？」

「ああ、良いって良いって。それより……！」

『？』

「この二人、どうしよう？」

『ムムムム……！』

『あ。』

俺の後ろにいるのは最初に質問してきたちびっ子二人だった。

「お二人ともズルいです……！」

「私たちも聞きたいことあるのに……！」

ちびっ子たちの迫力がドンドン増していく。

『ア、アハハハ……。』

スバルちゃんとティア？は後ろに下がっていく。すると見かねたのかフェイトさんが話しかける。

「まあまあエリオもキャロも、落ち着いて？」

『フェイトさん！……分かりました……。』

ちびっ子二人は少ししょんぼりする。するとはやてが、

「ん〜そうやなあ〜。いつの間にやらもうこんな時間やし……。お昼も兼ねて自己紹介タイムでもするかいな！」

見るといつの間にやら日が高くなっている。ちょうど……。昼ぐらいか？

「そうだな……。いやぁ腹ペコだぜ！」

「それじゃあみんな行こうか」

『はい！なのはさん！』

なのはさんがそう言い、俺たちは一路、機動六課内の食堂へと向かった。

………

はやて「さてと……。まずは智樹君からやな！」

食堂の席に座り、はやてがそう言う。ちなみに先ほどいなかった人たちもいた。

「分かった。じゃ、初めての人も初めてじゃない人も改めて、桜井

智樹だ！まあ智樹って気軽に呼んでくれ！よろしくな！」

そう言うとはやてから話し始める。

「ウチは八神はやてや！って昨日言ったか！」

「アハハ……。ま、まあ私も二度目だけど……。高町なのはです」なのは、って気軽に呼んでね」

はやてのボケになのはさん、っと！なのはは苦笑しながら言う。そして隣のあの人が手を上げる。

「えっと……。私も二度目になるけどフェイト・Ｔ・ハラオウンです。改めてよろしくね智樹君。」

「ああ、分かった！はやて、なのは、フェイトさん。……。で……。」

俺が三人と話し終え、後ろからの視線の先を向くと膨れっ面のおさげロリハンマー少女がこちらを睨んでいた。

「……。何だよちびっ子。」

「ちびっ子じゃねえ！アタシの名前はヴィータだ！」

怒り狂うおさげロリ……。ヴィータはバンツ！と机を叩いて声を荒げるが、はやてにまーまーと抑えられる。

「ワリイワリイ、次からは気をつけるよ、ちびっ子」

「デメエー！」

ジタバタと暴れるちびっ子をなのはとはやてがなだめる。さっきの下の恨みだ。そう思っていると次はイカロスを直してくれたこれまた美人の女性が話す。

「次は私ね？私の名前はシャル、この機動六課の医務医担当よ。よろしくね桜井君？」

「あ、どうも。昨日はイカロス助けてくれてありがとうございます！」

シャル「いいのよいいのよ」

そんなこんなで和やかムードでいると後ろに感触を感じる。振り返ると・・・

「ん？」

「はじめましてだな・・・。」

・・・

居たのはデッカい犬だった。

・・・

「い、い、犬が喋ったあああつ！？」

突然の声に、一同はビククリする。

「ああ、説明しとらんかったね？この子はザフィーラ。ウチの家族や！」

「ザフィーラという……よろしく頼む。」

そう言う犬？は器用にも前足をこちらに向ける。俺は半分腰を抜かしながらもその前足を取り、握手する。

「ははは……よろしく……。」

力無くそう言っていると、頭に何かが乗る感触がする。

「ん？」

見上げると、先ほど会った妖精……リインつつたけか？リインが頭の上に乗っていた。

「えーと……リインだっけか？」

「うわぁ〜」覚えててくれたですか〜？ありがとですう〜」

リインは俺の頭の上ではしゃいでいる。

「よかったなあリイン。」

「ハイです！」

……うん。なんか気持ちいいなこの感触。

「次はシャーリーや！」

続いてはやては昨日部隊長室で俺が話しかけられた女性に促し、女性話す。

「はい！八神二佐！はじめまして、シャリオ・フィニーノと言います。デバイスの調整とかみんなのサポートをしています。気軽にシャーリーって呼んでね」

「分かりました、シャーリーさん。」

お互いに会釈を交わした。

「よし、そうやね。次はフォワード陣！ライトニングからや！」

『はい！』

はやてにそう言われ、赤い髪の少年とピンクの髪の少女が元気よく答える。

「はじめまして！ライトニング3、エリオ・モンディアルです！」

「こんにちは！ライトニング4、キャロル・ルシエと言います！後この子はフリードリヒと言います」

「きゅるっ！」

そう言い、エリオとキャロの間から小さな竜？が飛び出した。

「おわっ！？ま、まさか・・・！竜！？」

「はい！フリードって呼んであげて下さい」

ははは・・・ますますファンタジーだな・・・。

「まあとりあえず・・・よろしくな！エリオ、キャロ！それにフリード！」

『はい！トモキさん！』

「きゆるう」

二人と一匹は元気よく答えた。ああ・・・いいねえ・・・いい子たちだ！

「続いてスターズの番や！」

「はい！ティアナ・ランスターよ、よろしくトモキ。」

はやてに言われ、オレンジ髪ツインテール少女、ティアナが話しかける。

「ああ、よろしくなティアナ。」

「さて、次はアンタの番よスバル・・・って何やってんのよ!？」

見ると話しかけられたスバルちゃんティアナの後ろに隠れるようにしている。

「だ、だってー！いざ話すとなったら緊張しちゃって・・・!」

「アンタはねえ……！話さないと分かんないでしょバカスバルッ！」

「うわぁっ!？」

ガバッ!

スバルちゃんはティアナに掴まれ、前に出される。

「わわつと!あ……!」

俺の前に来たスバルちゃんは緊張したのが固まる。

「あ……えつと……。」

「……えつと、スバルちゃん？」

「……ふえ。」

「へ？」

俺がスバルちゃんを呼ぶと感極まったのか、

「ふえくん!」

「な!？」

「ちょ、ちよつとスバル何泣いてんのよ!？」

泣き出してしまった。スバルちゃんはぐしょぐしょになりながら言

う。

「びゃて〜！ふえ〜ん！」

「えーと、えーと！ちょ、とりあえず泣き止んでええ！？」

「あゝ、智樹君悪いんやゝ！スバル泣かしてもうたで〜」

「人間きの悪いこと言っなはやて！」

そんなこんなでスバルちゃんが泣き止むまで数分かった。

「グスツ！し、失礼しました、で、えーと・・・スバル・ナカジマです！」

「ああ、久しぶり、スバルちゃん。」

「はいっ！」

そんなこんなで話していると先ほどのエリオ君が質問してきた。

「あのゝ、スバルさんはトモキさんと会われたことがあるんですか？」

「そうだねゝ助けられたって言った方がいいかな？」

『？』

スバルちゃんの答えにエリオ君は首を傾げた。するとティアナが補足をする。

「このバカが空港で火事に巻き込まれた時にね、トモキが助けてくれたんだって。」

『へっ!』

エリオ君、キャロちゃん共々感嘆の声を上げる。

「あ、そう言えば思いだしたけど智樹君。」

「ん?何だなのは?」

なのはに話しかけられ振り返る。

「火事の時だけど……どうして消えたの?しかもあの時と全く同じ格好に今も見えるんだけど……。」

「あれは俺もわかんねえんだよなあ。上からの声に顔を上げたら竹原だったし……って何でなのは同じ格好だって分かんのか?」

俺の質問になのはは驚きの情報を寄越した。

「にやははは……、実はね。あの時声をかけたの、私なんだ。」

「げっ!?!マジで!?!」

「うん、そうなの。だから少し前に智樹君見た時にあ、あの子じゃないかな、って思ってたんだ。」

「うっん何だか分からへんけど……智樹君、キミの今の年齢は

「？」

はやてが質問をする。

「えつと・・・14だけど。」

「え！そうだったの！？」

スバルちゃんが驚く。どうしたのかと思っているとはやてが説明をする。

「あんな、なのはちゃんがスバルと智樹君を見つけたのは4年前なんよ。」

「マジで！？」

「だから私今15歳なんです！」

「うそおおつ！？」

スバルちゃんの仰天発言に度肝を抜かされた俺は大声を上げる。

（オイオイどうすんだよ・・・ダイブゲームのゲートがまさかあの夢の4年後に繋がるなんて！まさか・・・このまま帰れない！？）

「はあゝ。」

思わず溜め息をつく俺を見て気の毒に思ったのか、はやてが話す。

「ま、まあ色々と込み入った話は後にして……なんか智樹君に質問ある人ー。」

「あ、はいっ！」

はやての問いにキャロちゃんが答える。

「あの、トモキさんのデバイスってなんなんですか？」

「ああ、それなら……。」

『其が説明いたそう！』

『！！！？』

突然の声にはやてたち大人組以外のみんなが驚愕する。

「オイ幸村！みんなをいきなりビックリさせんなよ！」

『ああ！？親方様失礼いたしましたあ！』

「え！？え！？な、何！？」

「スゴいです！喋ってます！」

突然の声にビックリ仰天の者もいれば、興味深々つといった者もいた。俺はスバルちゃんたちに説明を始めた。

「ああ、悪い悪い。コイツが俺のデバイスみたいな物、トリニティスターだ。」

『どうも、トリニティスターと言います。先ほどは失礼致しました。』

「さっきと何か随分感じが違う……？」

『良く気がついたなあ、嬢ちゃん！』

「ッ！？また変わった！？」

ティアナがそう言うとシエルが言い出す。

『そう、俺らは状況に合わせてスタイルを変える。だからAIもそれぞれに適したものに変わってるって訳だ。ちなみに俺は格闘戦用のシエルブリットだ！』

『へっ！』

シエルにしては優しい説明にみんなは納得する。

「こんなスゴいデバイス、どこで手に入れたんですか？」

「ああ、それはイカロスのカードで……ってアレ？イカロスどこ行った？」

エリオ君の質問に答えようとした俺だったが、ふとイカロスが居ないのに気づく。どこだと思っていると……

「マスター……。」

「あ、オイお前どこ行つてたん……だ……だ……だ……だ……ッ!?」

イカロスの声に振り返るとそこに居たのは……!

『な、な、な、何じゃこりやアアアアアッ!?』

1メートルは越すであろうバカデカイ魚を持ったイカロスだった。

「お、お、お前!何を持ってきてんだよ!?」

「お食事をこの人数でするなら……コレくらいは必要かと思ひまして……。」

「バカかあ!お前何の為に食堂に来たと思つてんだあ!」

「申し訳ありません、マスター……。」

そんな中はやてたちかというと、

「いやゝこらまたデッカイ魚やなあ!」

「本当!スゴいおつきい!」

「というよりこんな大きなミッドにいたんだ……!」

「ギガデケエ!」

「お、おいしそうゝ」

みたいな感じで三者三様だった。

「ま、まあとりあえず折角イカロスちゃんが採ってきたんやし・・・みんなを呼んで食べよか。」

そのはやての一言でイカロスの採ってきた魚は食堂の皆さんの調理により、後に六課のみんなにへ振る舞われた。

その後、先ほどの話の続きやイカロスの紹介をしながら昼食を終えた俺たちは今度はスバルちゃんたちが模擬戦をするから見てくださいわれ、再びあのヴァーチャルスペースへと来ていた。

「じゃあ、今日の訓練を始めるよ!」

『はい!』

なのはの言葉にスバルちゃんたち4人が答える。

「今日はガジェット16体、まあ一人四体って所かな?制限時間は20分で出来るかな?」

『はい!頑張ります!』

「うん、じゃあスタート!」

ピイイイッ!

音と共にあの時倒した丸いロボットがスバルちゃんたちの前に現れた。

「え!アレって!?!」

「ヴァーチャルシステムを応用しているんです。だからあんな風にガジェットも出せるんですよ。ちなみにこのビル街もヴァーチャルよ。」

「ウツソオ!？」

いきなり出てきたロボット・・・ガジェットに驚いているとシャーリーさんが俺に説明する。

『ハアアアツ!』

『たああああっ!』

ドカアアアンツ!

そうしている内にスバルちゃんたちは早くも二体のガジェットを倒す。

『ふむ・・・なかなかでござるな!』

スターのAIの内の一つ、幸村が言う。

『エリオ殿は高速移動を生かした突破型、スバル殿は防御を全面に出し、単身で突っ込んでいくタイプ、ティアナ殿は後方指揮を担当する狙撃型、キャロ殿は後方で魔法支援担当、といったところでござろうか。』

『チームワークもなかなかいいし・・・戦法も悪くない。更に高めればもっとスゴくなりますね。』

『だがまだまだガキ共ばっかだからな！まだまだ突っ込んでいき過ぎたり、成長しきれてない所為で武器自体に振り回されてやがる！』

幸村の後にフリーダム、シエルが続いて感想を言う。

「はあ、よう分かるなあスター！」

『それほどでも、はやて部隊長。しかし、ティアナは少し力み過ぎているような……。』

「あ、分かる？私も少し心配しているんだ。」

フリーダムの感想になのはが言う。一方、俺はというと、

（うゝむ……。スバルちゃんたちが敵を倒してる以外、専門的な事は全く分らん……。）

そんな感じで俺は蚊帳の外の中、他のみんなが話し込んでいる間にスバルちゃんたちは16分でガジェットを全て倒し終えた。

「いやゝみんなお疲れさんな！」

「とりあえずこれで今日の予定の分は終了、今日はもうシャワーでも浴びて明日も頑張ってね！」

『はい！ありがとうございます！』

はやてとなのはの言葉に答えたスバルちゃんたちはアップをし始めた。

「そうや！智樹君とイカロスちゃんもスバルちゃんたちと一緒に
ってきたらどうや？」

「ん？ああ、そうだな。行かせてもらっよ。」

はやてのお言葉に甘えてスバルちゃんたちと合流する。

「オーイ！みんなお疲れさん！」

『トモキさん！』

「トモキ！」

「トモちゃん！」

上からちびっ子ズ、ティアナ、スバルちゃんの順にそう言う。・・・
ってトモちゃん？

「スバルちゃんその呼び方・・・。」

「あ、ゴメン！嫌だった？」

「いや違うけど・・・どうして？」

「いやあなんかアタシの方が年上だって分かっちゃって気を使わせ
たらいけないなあ、って思ったからフレンドリーに話してみよう
と・・・。」

【ともちゃーん！】

(・・・なんかそはらに呼ばれてるみたいだな・・・。)

そはらが俺を呼んでいたのと同じ言い方に、少しアイツを思い出す俺。

「駄目かな・・・?」

「あ、いや！いいぜ！それに全然気にしないでいいって！」

「・・・そつか！じゃあよろしくね！トモちゃん」

「ああ、よろしくなスバルちゃん！」

そうして笑顔を交わす俺たち。

「ほら、スバルもトモキもさっさと行くわよ！」

そうしていたらティアナに怒られた。

「わりい！すぐ行く！」

「わわ！待つてよティアン！」

そのまま一路、シャワー室へと向かう。

「じゃ、俺たちは男子の方へ。イカロス、お前はスバルちゃんたちと女子の方に行ってこい。」

「はい、マスター・・・。」

そうして別々に分かれ、シャワー室に入る俺たち。

ザアアアアアア。

シャワーを浴び、身体の汗を流す。特に朝の模擬戦で汗だくだっただけに一気に身体がスツキリした。

「トモキさん。」

「ん？どうしたんだエリオ？」

エリオ君に話しかけられ身体を拭いていた俺は振り返る。

「どうしたらトモキさんみたいに強くなれるんですか！？」

「うーん、どうしてって言われてもなあ。アレはほとんどスターの力に頼りっぱなしだしなあ。」

「でもトモキさん！シグナム副隊長を気絶するまで追い詰めるなんて誰にも出来ませんよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あの時の事は色々子どもの前じゃ言っちゃいけない事もあるのでなんとも言えずに立ち尽くす俺。

「教えて下さい！お願いします！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（どうする・・・どうすんだよ俺！？）

端から見れば全裸の姿の男2人が向かい合っているというシチュール
極まらない状況。

（どうしたら・・・！どうしたらいいんだよ！？）

その時、頭に響いてきた声はやはりあの人だった。

【・・・も坊、智坊おー！】

（じ、じいちゃん！？）

・・・

『いいんじゃない？』

『じいちゃん？』

手を大きく広げ、じいちゃんと言う。

『おなご達の魅力を知らない子どもがいるのなら・・・教えてやるのがワシら男の使命じゃないか？』

『じいちゃん・・・！』

『だからこそ、お前の出番じゃよ、智坊!』

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・わかった・・・・・・・・!」

「え!?じゃ、じゃあ!」

「俺がお前に教えてやる!強さの秘訣を!」

「は、はい!」

こうして俺はエリオ君に男とは何たるかを教えることとなった。

五話・了

五話「訓練（のぞき）はお楽しみ！？」（後書き）

という訳で五話をお届けしましたが・・・本当にお待たせ致しました。そして正直こんな駄目小説ですいません。

折角楽しみで来て頂いている皆様には申し訳ない思いでいっぱいです。自分もまだ高校生という身分なのでここ最近は何も出来ていませんでした・・・。

これからは更新ペースも遅れると思いますが、どうかお付き合いお願いいたします。

次回、男たちの桃源郷。ゆめみたさき テイク・オフ！

六話「男たちの桃源郷（ゆめみたさき）。」（前書き）

皆様、お待たせいたしました！第六話、どうぞ！

六話「男たちの桃源郷（ゆめみたさき）。」

sideスバル

ザアアアアア。

「はふっ」

アタシとティア、キャロ、そしてイカロスさんはトモちゃんたちと分かれて女子のシャワー室に来ていた。上から降り注ぐ温かいお湯が身体の汗を洗い流していき、心地良い気持ちにさせてくれる。

「あゝ疲れがとれてくっ」

「なにババ臭いこと言ってんのよスバル……。」

「あはは……、ゴメンゴメン。」

そんな会話を交わしながら体を拭いていると、

ガチャ。

「?」

誰かが入ってくる音がし、振り返ると、

「おゝみんなちゃんと身体洗つとるか?」

「ぶ、ぶ、部隊長!？」

八神部隊長がそこにいた。

「な、な、な、何でここに!？」

「いやあゝそういやみんなと裸の付き合いをしとらんかったなあゝ
と思うてな。．．．ちなみになのはちゃんとフェイトちゃんも居
るで?」

「しつかり汗流してる?みんな」

「キャラ、久しぶりに洗ってあげようか?」

『なのはさん!?』

「はい!フェイトさんお願いします!」

いきなりなのはさん達の登場に度肝を抜かされたアタシ達。若干
一名は除くけど．．．。そんな風に思っていると．．．。

「ムッフッフー」さあゝて、スバルの胸の成長具合は?」

ガバアッ!

モミユ。

「ひゃあ!?!?!?!」

いきなりアタシの胸を掴みだす部隊長。

「おゝこれはこれはまだまだ成長が期待できそうやなあゝ」

モミュモミュ。

八神部隊長はアタシの胸を揉みしだいていく。

「く、くすぐったいですって部隊長おゝ！ふやあんっ！？／／／／／」

「ええやろええやろ女の子同士なんやしゝ」

モミュモミュモミュ。

「ひいやっ！？あんっ！／／／／／」

そんなこんなしていると、

「コラはやてちゃん、暴走しないの」

ガスッ！！

「ギャハッ！？」

部隊長の頭に手刀が振り落とされ、ドシャアッ！という音と共にその場に倒れる部隊長。見るとそこにいたなのはさんは……

「な、なのは……さん？」

かなり黒いオーラを纏っていた。みんなに見えるほどかなりハッキリな。

」

モミュモミュ。

「あ、いやちよつと！？ッ！ひいやっ！？／／／／」

「ホレホレ」大きくなあれ大きくなあれ」

「ふ、ひっ！？ふやあんっ！？／／／／」

アタシと同じようにティアの胸を揉みしだいていく八神部隊長。するとなのはさんが構えて言う。

「はやてちゃん．．．．！」

「ッ！．．．．逃げるが勝ちや！」

ダッ！と駆け出す部隊長。しかし此処はシャワー室、走れば勿論．．．．、

ッルンッ！

「ひゃあ！？何でこんな所に石鹸があ！？いやオイシイけど！オイシインやけどおおお！」

石鹸に足を取られ、そのまま後ろに倒れかける部隊長。なのはさんが「悪は滅びたなの」みたいな笑みで見ている中、部隊長のちよつど後ろの個室が開いた。そこから出てきたのは．．．．！

モミュン。

「ん？・・・イ、イカロスちゃん？」

「大丈夫ですか・・・？はやてさん・・・？」

イカロスさんだった。ちょうど出てきたイカロスさんの胸に部隊長は倒れかかったみたいだった。

「あ、ああ大丈夫やよ・・・はっ！？」

「どうか・・・しましたか・・・？」

イカロスさんは首を傾げながら尋ねた。

モミュ。

「！？」

「こ、これは・・・！逸材や！千年に一度の逸材やで！」

そう言いながらイカロスさんの胸を揉む部隊長。

「この大きさ！形！弾力！どれをとっても最高ランクや！フェイトちゃんやシグナムにも匹敵するもんの持ち主やでイカロスちゃんは！」

「ふ、ふえ！？わ、私！？」

モミュモミュモミュモミュ。

フェイトさんはキャラの頭を洗っている途中に聞こえたようで振り返って驚くが部隊長はそのまま揉み続けていた。

「・・・・・・・・・・。」

イカロスさんは黙ったままだ。・・・・ホントに大きい・・・・！なんかスツゴく柔らかそう・・・・！そう思っていた矢先に、

「はいそこまでのな。」

「Axel shooter」

ズドドドドドドッ！

「ゲボラッシャアッ！！？」

なのはさんの声と共にピンク色の魔力弾たちが部隊長を襲い、部隊長は再びドシャアッ！という音と奇声を発しながら倒れこむ。

「へ！？ふえ！？」

振り返って見るとなのはさんの手には赤い宝石・・・・レイジングハートが握られていた。

「な、なのはさんそれはちょっとマズいんじゃない？」

「・・・・・・・・平和の為には犠牲はやむ無しなの・・・・。」

「Don't worry that is minimum Axel shooter.（ご心配なく、あのアクセルシューター

には攻撃力はほとんどありません。）」

なのはさんとレイジングハートはそう言ったけど……部隊長起きないんだけど!?

「ゴメンねイカロスちゃん、はやてちゃんが暴走しちゃって……」

「いいえ……。」

そしてなのはさんはそのままイカロスさんに話かけた。イカロスさんはなのはさんに向けてお辞儀を返した。その時、背中に見えたのは綺麗な白の翼だった。

「綺麗……!」

「…….?」

「あつ! い、いやぁイカロスさんの羽根がスツゴく綺麗でつい……」

首を傾げながらこちらを見るイカロスさんにアタシは言う。するとなのはさんはイカロスさんの背中を見て感想を言う。

「ホントに綺麗……! わっ、本当に背中から生えてるんだ……」

「エンジェロイドでしたっけ……?」

「はい……。私はエンジェロイドタイプα（アルファ）……」

イカロスです……。」

「わっ、え！？は、はい！」

ティアの問いにイカロスさんが答える。……そういやイカロスさんってどんな風にトモちゃんと出会ったんだろう……。ま、いつか！後でトモちゃんに聞いて見よつと！……。そういやトモちゃんたちもう上がっているのかなあ？

side 智樹

「俺がお前に教えてやる！強さの秘訣を！」

「は、はい！」

シャワー室のド真ん中で俺はエリオを一人前の漢おとこにへとする宣言を高々とエリオに告げた。

「じゃ、じゃあ何なんですか！シグナム副隊長を気絶させた強さの秘訣って！？」

「それはだな……！」

「それは……。！？」

俺の回答を待つようにエリオは身構え、俺はエリオに決定的に足りない”あの事”を言った。

「エロだ……！」

「・・・・・・・・・・へっ!？」

俺の言葉に固まるエリオを気にする事なく俺は続ける。

「そう!エロ分だ!!エリオ、お前に決定的に足りんのはエロ分だ
!!--!」

「あ、いやトモキさんそれはおかしいんじゃないでしょうか!？」

エリオはあたふたしながら答える。

「・・・・・・・・・・エリオ、お前戦闘で力が最も発揮される時を知
っているか・・・・・・・・？」

「えっ!？」

「それはな・・・・・・・・!まず生き残ろうとする時だ!!!--!」

「ッ!？」

俺の言葉に衝撃を受け固まるエリオ。俺は話を続けた。

「人間は誰しも命の危機にあつた時、種の生存本能に従い、予想以
上の力を発揮する事があるもんだ。要は火事場の馬鹿力って奴だ。」

「な、なるほど・・・・・・・・!あ、でもそれとエ、エロって関係ないん
「第二に!」ッ!？」

反論しようとしたエリオ君を一喝し、俺は話を続ける。

「男の女子に対する欲望……！つまりはエロスの欲求が高い者が最後に勝つんだよ……！」

「ッ……！？」

エリオは驚愕と疑問でいつぱいの顔をこちらに向ける。

「信じられないか……！じゃあいーぜ！見せてやるよ！おいスター！あのモードだ！」

『承知！親方様の記憶再生モード！オン！』

俺はスターを取り出し、中に掲げる。するとスターは形を変え、映写機みたいなのにコードをつけたヘルメットが繋がった姿に形を変えた。

「え、ええええ……！？」

驚くエリオをよそに、俺はヘルメットを被って叫ぶ。

「記憶再生！雪合戦！」

『上映開始！』

side エリオ

バタッ！

「トモキさん!？」

ペカアアアア!

ヘルメットを被ったトモキさんは気を失い、床に倒れこむ。ボクの心配をよそにスターが変化した映写機はペカ!。と光を放って虚空に映像を映し出し始める。

「智 映」というロゴマークに波が打ち上げられる映像が映し出された後、場面はたくさんの人がいる部屋の中、トモキさんが机に突っ伏している場面に切り替わった。

「これは……ある、雪の大変積もった日だった……!」

「ト、トモキさん!？」

いきなりのトモキさんの声に驚くボク。どうやらナレーションのようだ。

「全ては会長のあの放送から始まった……!」

「ピンポンパンポォン」

女の人声が放送されトモキさんはピクツと動く。

「合戦よ」

その言葉にトモキさんは更に身体を震わせる。

「男子チームと女子チームに分かれてこの国古来からの合戦をする

わっちなみに女子チームの大將は会長が、男子チームの大將は2年C組桜井智樹君よっ」

その放送が終わると今度は男女に分かれた人たちが雪玉を作っていたりする場面に切り替わった。トモキさんは椅子にグルグル巻きにされて座らされていた。

『こうして俺は……無理やり大將にされ会長と対峙させられた……最初俺はさっさと負けて帰るつもりだったんだ……あの言葉を聞くまではな……!』

『では合戦を始めるわっこの合戦では雪玉に当たっても何度でも復帰出来るわっ先に相手チームの大將を戦闘不能にした方の勝ちよっ』

映し出されているトモキさんはいかにも不機嫌そうに頭を傾けていたけれども、

『なお勝利チームには負けた方を1日好きに出来る権利を与える、というのでどうかしらっ』

その時、男子の方の空気が変わったのボクは感じた。

『好きに出来るだ……!?!?』

『お、親方様!』

『親方様!』

トモキさんに周りの男の人が話しかける。

『どうやら・・・時が来てしまったようじゃな・・・!』

トモキさんは縛られていた縄を一気に千切り、姿を何かの鎧を身に着けた姿にし、叫んだ。

『敵は！本能寺にありい！！!』

『ウオオオオオオオオオオ!!!!』

「ウワツ!?!」

あまりの気迫にボクはさらにビククリする。

『そうして俺たち男チームは結束力を高め、女子チームを撃破寸前まで追い詰めることに成功したのだった・・・。』

映像には男の人たちがスゴい統率力と突破力で女の人たちを追い詰めていく姿が映し出され、やがて終わった。そして気絶していたトモキさんは起き上がり言った。

「この勝因は何だと思う?」

「えっ!?!え、えつと〜!?!」

「それはつまり、男の欲望だ!」

「ッ!?!」

「好きにしているという宣言を聞いた時モテない男子たちの頭の中

『ウルサイ！それともエリオ！お前は強くなりたくないのか！？このまま紳士面したままじゃ強くなれないんだぞ！』

「？」

突然の声にうちは疑問を持つ。あの声……エリオ君に智樹君？

『いいから行くぞ！』

「ウワツ！？」

ウーン。

ドアが開くがそこには誰もおらんかった。あれ？確かに声は聞こえたんやけど？

「ワツ！？や、八神部隊長！？」

「バ、バカエリオ！声を出すんじゃない！」

見えへんけどドアの所から声がする。うちはそこに向かって声をかける。

「2人とも何しとるん？というより見えへんけどそこにおるんやろ？」

『ッ！？』

うちは見えへんけど確かにそこに智樹君らはおる。そしてその後し

ばらくして智樹君が話し始めた。

「……わかったよ、スター。」

『承知！この部屋の防音封鎖展開、カメレオンステルスモード風景完全同化機能、一部解除。』

スターのその音声と共にうちの目の前に腰にタオルをつけた智樹君とエリオ君が現れる。

「……え、え〜と……とりあえず今は……？」

「……さつきいきなり現れたのはスターの能力のうちの一つ、カメレオンステルスモードの力なんだ。自分たちの身体と周りの景色を完全に同化できんだよ。そして今発動したのはサイレントストップっていった一定範囲の全ての防音、封鎖、凍結が出来る能力なんだ……全部スターから聞いたんだけどな。」

「ほ〜それはスゴいなあ！……で？何で2人はここに？」

「そ、それは……！」

何やか困つとる2人。うちは智樹君の性格……いや性癖からしてアレやろうと思うて聞いてみた。

「覗きやる？」

「……はい。」

大人しく頭を下げる智樹君。しかしいきなり顔を上げて言った。

「でも違うんだ！エリオは俺が引つ張って来ただけで何にも関係ないんだ！許してやってくれ！」

「トモキさん！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

再び頭を深く下げ、うちに言う智樹君。するとエリオ君も言った。

「ボクも、ボクにもトモキさんを止められずついて来てしまった責任があります！でもトモキさんはボクのためと思ってやったんです！だからトモキさんを許してあげて下さい！お願いします！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

2人に頭を下げられて少し戸惑ってまううち。そこでうちは智樹君に質問を試してみた。

「・・・・・・・・智樹君、君にとっておっぱいって何や？」

「！？」

2人に大きな衝撃が走る。特に智樹君なんて大きく目と口を開きこちらを見ている。

「智樹君にとって女の子の裸って何や？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「智樹君にとってエロって何なんや？」

「・・・・・・・・俺にとって・・・！」

智樹君は口を開き言い放つ。

「俺にとつておっぱいは夢だ！野望だ！そしてエロとは俺の人生全てだ！」

ドッパアアアアアンツ！（荒波が岩浜に打ち上がるイメージです）

・・・・・・・・・・・・・・・・

「気に入った！」

『へ！？』

「うちも混ぜてや？智樹君。その夢を掴みに・・・・・・・・！」

うちはそう言いながら手を差し出した。

「はやて・・・・・・・・！ああ！」

ガシッ！

固い握手をし、うちは智樹君と共同戦線を結んだ。フッフッフ・・・！待つとれよなのはちゃんたち・・・・・・・・！

「フッフッフ・・・・・・・・！」

「ハッハッハ・・・・・・・・！」

『アツハツハツハツハツ!!!』

「あ、あの〜お二人とも!？」

エリオ君をそっちのけでうちと智樹君は高笑いをあげたのやった。

sideスバル

「（ゾクッ!）ッ!？」

「?どうしたのなのは?」

「い、いや!何でもないの!」

隣でお湯を浴びていたなのはさんはいきなり身体を身震いさせて振り向いた。隣でフェイトさんが心配したがなのはさんは気のせいだと言った。

「だったらいいんだけど……。ん?キャラ、どうしたの?」

「い、いや!?な、な、な、何でもないです!？」

その声にアタシはフェイトさんのところで今度は身体を洗われていたキャラが胸に手を当てているのに気づく。

「……気にしなくてもまだまだまだ成長期だからおっきくなるよ?」

「はうつ！……／／／／」

アタシの言った言葉にキャラは顔を真っ赤にした。そうするとティアが言う。

「コラスバル！そんなこと言わないの！」

ゴツッ！

ティアはそう言いアタシの頭を軽く小突いた。

「っうゝ！？ゴ、ゴメンねキャラゝ！」

「……はい／／／／」

キャラは未だに顔赤くしたまま。そうしていると

「ひゃあんっ！？／／／／」

「ッ！？ど、どうしたのなのは！？」

なのはさんがいきなり声を上げる。どうしたのかとなのはさんのところを見てみるとなのはさんの胸が見えない何かに掴まれていた。

「だ、誰なの！？ってふゃあんっ！？／／／／そ、そんなところ触らないでふゃあっ！？／／／／」

モミュモミュ。

『ギャアアアアアアッ!?!』

なのはさんの放ったアクセルシュートはアタシたちをよけて全方位に放たれる。そのうち何発かは見えない誰かに当たったようだ。・・・? なんか今の声・・・聞き覚えがあるような・・・?

ゴンッ!

「ん?・・・・・ツ!?’

プカッ。

「ハ、八神部隊長!?’

先ほどの攻撃で壊れた水道からお湯が流れ出て、床が水溜まりみたくになってるなか、アタシの足に当たったのは八神部隊長の頭だった。

「きゃあああっ!?’

「ッ!?’

「エ、エリオ君!?’

キヤロの声に振り返るとそこには赤い色をしたお湯が周りに広がる中、仰向けに気を失っているエリオ君がいた。すると何かからの胸揉みから解放されたフェイトさんも近寄る。

「ああ!エリオ!大丈夫!?’

「一体どうして……!?!」

「原因は分かってるの……!」

ティアの問いになのはさんは入り口の方を見ながら言う。アレ? 何だか誰も居ないのに水面が波立ってる!?

「O H A N A S H I してくれないかな……その人……
いや、智樹君……!」

ビクウツ!?!

水面から波が止まる。しばしの沈黙の後、再び水面が動く。

バシャシャツ!

「待ちなさい!」

『ッ!?!』

駆けだしていたトモちゃん? の前にティアが立ちはだかる。駆けだしていたトモちゃん? は足を止まらせるがそこには先ほど八神部隊長が足を滑らせた”アレ”があった。

ツルンツ!

『おわあっ!?! な、何でこんなところに石罅があああああっ!?!』

そう言いながら姿を現し滑っていくトモちゃんはティアの方に倒れていく。

トモちゃんに向けてクロスファイヤーシュートを全弾撃ちまくった。
。。。

sideイカロス

ピコンッ！ピコンッ！

「マスターが。。。困ってる気がする。。。。」

私ははやてさんを更衣室に寝かせた後、先上がりマスターと皆さんを待っていた。そうして待っている内に何だかマスターがとっても困ってる状況になっていそうな感じがしていた。なので行こうとしていたら。

「トモキの。。。！バカアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！？！！！！！」

チユドオオオオオオオオオンッ！！！！！！！！

先ほどまで居たシャワー室でティアナさんとマスター、そして爆発音が響いた。

「。。。。。。。。マスター。。。。。」

窓の外を見るとシャワー室の方から煙がもうもつと立ち込めていた。
。。。

s i d e リン

新暦75年、×月○日。

今日は智樹さんがシグナム、ヴィータちゃんとの模擬戦をしました。シグナムたちは苦戦をしていたのです。でも、結果は智樹さんがシグナムを気絶させて、ヴィータちゃんが智樹さんを戦闘不能にして引き分けになったです。

そして夜にですが・・・シャワー室で謎の爆発があったです。この事故の被害者はやてちゃん、エリオ君、智樹さんが医務室送りだったです。

報告者・リンフォースツヴァイ。

六話・了

六話「男たちの桃源郷（ゆめみたさき）。」（後書き）

と、いうワケで第六話……。ダ、ダメだ……。！また暴走し過ぎてワケ分かんない展開にしてもうた……。OTL

そして本当に待たせてしまっすみませんでした。この二週間、アクセスしてくれた人、本当にすみません、お気に入り登録をしてくれた皆さん、すみませんでした。

先の後書きでも触れましたが……。私事ではありますが私はまだまだ受験シーズン真っ只中の受験生であります。勉強の合間をぬって書いておりましたが……。どうしてこうなった……。とか思えない出来になってしまいました。本当にすみません。皆さんの期待に添えているのかと自問自答しております。こんな私ですが、もしこの話を気に入ってくれたら幸いと思っております。では次の更新ではもっと期待に添えるような文を書いて帰って来たいと思います。では長文失礼いたしました。

次回、天才と天上人の語らい。

閑話「天才と天上人の語らい。」（前書き）

六話と並行して書いてた閑話です。どうぞ！

閑話「天才と天上人の語らい。」

side 守形

カタカタッ！

「この座標はどうだ？ニンフ！」

ピッ！ピッ！ピッ！ブッブー！

「うっん、ダメ！全然繋がらない！」

「ダメか・・・！」

智樹とイカロスがゲートへと消えて三日、俺たちは何とかしてもう一度ゲートを開こうと幾度となく再突入を試みていたが、結果はドレも同じ、失敗の連続だった。

「くそ・・・！もう一度だ、ニンフ！もう一度洗い直す・・・くっ！」

「スガタ！？」

「守形先輩！？」

俺は続けてもう一度試みようとしたが、三日三晩寝て居なかった所為か、少し立ち眩みを起こす。ニンフと見月が心配するが俺は手で制す。

「大丈夫だ……！コレくらいは問題ない……！」

「でも……先輩！」

止めようとする見月を制し俺はパソコンに向き直る。その時、隣に居た美香子がこちらに近づいて言う。

「守形君……。」

「……何だ美香子……。」

パシッ！

『！！？』

「し、師匠！？何を！？」

俺の頬を美香子は平手打ちする。美香子は隣でそう言うアストレアを制しながら鋭い目つきで言う。

「……少し休みなさい……、そうしないと考えれるものも考えられなくなるわ……。」

「……なかなか痛い。本気というワケ、か……。」

「……すまない……、少々焦り過ぎていた……。」

俺がそう言うと美香子は少し安心したように口元を緩め、こう言った。

「そうそう、少し眠って夢でも見て、スッキリすれば何かが浮かんでくるわ……。」

「……その通りだな……人間が通常集中し続けられるのはもって90分。コレでは打開策も何も浮かばない……。少し仮眠を取って……。待てよ、夢だと？」

「……？どうしたんですか？先輩？」

見月が聞くが俺はある可能性に気づきいきなりニンフたちの方を向いて言う。

「……ッ！ニンフッ！シナプスの方には繋がられるか！？」

『！！？』

「えっ！？あ、う、うん！やってみる！」

俺の言葉にニンフたちは驚いたが、ニンフはすぐに装置を操作していく。

「どうしたの？守形君！？」

美香子が聞く。俺は仮説を皆に向かって言った。

「もしシナプスに繋がった智樹の夢の中に入れたなら……。あそこには！」

「……ダイダロスさん、ね？」

「そうだ．．．！今回の非常事態に対して、コレほど頼りなる人物は他には居ない筈だ！」

チーン♪

「出来た！スガタ、シナプスへのゲート、開いたよ！」

ゲートが俺たちの前に開かれ、ニンフはこちらを向き言っ。

「すまない、ニンフ！．．．俺が行ってくる、見月と美香子はここにいろ。」

「先輩（守形君）．．．．．！」

「気をつけてね、スガタ！」

3人の言葉を背に、俺はゲートへと入って行った。

パシユユユユンッ！

．．．．．

キユオオオオオオッ！

「つと．．．！」

俺は智樹が元々見ていた夢、シナプスへ無事に到着した。そこで待っていたのは……。

「待つてました……！」

「ダイダロス……！」

大きな翼を持つ少女……イカロスたちを作り上げたシナプスの人間、ダイダロスであった。

「ダイダロス、早速だが……、」

「アルファと……トモ君の事ね。」

ダイダロスは頷いた。俺も頷き返し、持ってきていたパソコンからデータを引き出し、ダイダロスに見せる。

「ああ、この3日間、地球上のありとあらゆる座標と智樹が見た夢の先の座標とを比べたが……どれも当てはまらなかった。……これは推測に過ぎないんだが……」

「トモ君とアルファは今この地球上……いや、この世界自体に存在していない、って言いたい？」

「ッ！……そうだ……智樹が夢で見た場所はこの世界ではなく、別の世界の可能性がある。そうであるとした、今までの例から考えにくいんだ……！」

ダイダロスの言葉に少し面食らう俺だが、俺はそのまま話続ける。

「だが何故だ！？どうして智樹の夢が別の世界と繋がり、アイツはダイブゲームから帰って来れなくなっている？そしてもう一つ、イカロスは何故ダイブゲームのゲートに入る事が出来た？エンジェロイドはダイブゲームは出来なかった筈だ！」

俺はつい声を荒げてダイダロスに問うが、ダイダロスは黙って顔を横に振る。

「ごめんなさい……！でもそもそもトモ君の夢が何故ここ……シナプスに繋がってしまったのかさえ分からなくて……！」

「す、すまん。焦り過ぎていた……。」

「いえ、いいの……。でも、一つだけ気になる事があるの。」

「気になる事だと？」

ダイダロスはコクンと顔を縦に振り、話続ける。

「ええ……。コレを見てみて。」

そう言いダイダロスは彼女の目の前にある端末に幾つかのコマンドをし、空中にディスプレイが映し出される。そこには地球と太陽の簡略図が描かれていた。

「コレは……。！？」

「あの時……。トモ君とアルファがゲートに入った時、太陽から過去最大規模の太陽フレアが出ていたの。」

「太陽フレアだと？」

そう言いダイダロスは端末を操作し、実際の映像を見せた。太陽から何本もの巨大な火柱、プロミネンスが吹き出し、太陽がその輝きをいつそう高めていく映像が映し出される。

「なんて激しい活動だ……！」

「そしてそのフレアの影響は……地球全体に大きな干渉を与えた。例えば動物たちの活動の変化や……機器の動作異常。特に顕著にそれが現れたのはオーロラの地球全域における大量発生。普通、オーロラは太陽からの太陽風と地球磁場が干渉して起こる現象で、北極圏などの磁場が薄い場所で見れない……筈なんだけど……。」

「それがこの活動の為に地球全域にオーロラが現れたということか……。ッ！まさかこの爆発的な規模の太陽風の為に！？」

地球の至る所にオーロラが現れている映像を見ていた俺はある可能性に気づきダイダロスの方を見る。彼女は頷き、言う。

「そう……、あなたの考えている通り、トモ君たちが通ったゲートはこの磁場嵐の影響でおそらく夢じゃなく現実の世界に繋がってしまつて……トモ君たちは……次元を超えてしまつた。」

「次元を……超える……！」

（なるほどな……夢ではなく、現実の中へと入ってしまったワケか……！……しかし……！）

「だとしたら・・・智樹たちの行った世界に行く方法はあるのか？」

「それは・・・!」

ダイダロスは顔をうなだれる。

「・・・ゴメンなさい、私も調べていたんだけど・・・どの、どこの次元にトモ君たちが行った世界があるか解らないの・・・。」

「そうか・・・。」

ダイダロスの言葉に俺は肩を落とす。しかし、

「でも・・・。」

「?」

ダイダロスが呟き、俺はダイダロスの方に向きかえる。

「もう一度この太陽フレアと同じ規模の活動が起きた時にまた夢の中に突入すれば・・・あるいは!」

「しかしどうする・・・!そんな大規模の太陽風による磁気嵐なんてそうそう起きんぞ!」

「それはっ・・・!」

「駄目、か……。くそっ！せめて同じだけの磁気嵐さえ起これば……！」

「ゴメンなさい……。力になれなくて……！」

一度は希望が見えかけたが、そんな大規模な活動、起こるのは何年先、何十年先とも知れない。駄目かと思った時、俺の頭にある考えが浮かぶ。

（……。磁気嵐？……。嵐……。天候……。気象……。ッ！）

「こちらはまだ解析を続けるから……。」「いる。」「え？」

俺の言葉にコンソールを扱っていたダイダロスは振り返った。

「いる、一人だけ！天気を自在に操り、我が物とする者が！」

俺の言葉にハッとなり、口を開くダイダロス。その口から出た名は……。

「……。ハッ！タイプ……。Z（ゼータ）！？」

「そう……。！風音……。日和だ！」

……。

sideダイダロス

「とりあえず．．．コレがあ那时的太陽風による磁気嵐のエネルギーのデータ。それとコレを．．．彼女に。」

「コレは．．．？」

私は守形君にある装置を渡した。彼女．．．Z（ゼータ）の能力を補助する役目を持つ装置を。

「きつと彼女の役に立つはず．．．それと．．．コレを。」

「コレは．．．カード？」

私の渡した三枚のカードを受け取り守形君はそう言う。

「私が持っている旧式のカードなんだけど．．．アナタたちを守ってくれると思う。持って行ってあげて。」

「．．．すまない、助かる。」

キュイイイイツ！

ゲートが開き、守形君はこちらを一礼してゲートの中へと入って行った。

「．．．．．どうか．．．無事で．．．！」

私には祈るぐらいしか出来なかった。

閑話・了

閑話「天才と天上人の語らい。」（後書き）

はい、というワケで・・・とりあえず並行して書いてた閑話、投稿いたしました。とりあえずこれでレギュラーキャラたちを出せるフラグが立ったぞー！と思いながらもダイブゲームの関連の解説の雑さに・・・俺オワタ＼（＾o＾）ノ・・・だ、だって仕方ないじゃない！文系だもの理系じゃないもの！理科あんまり出来ないんだもん！

・・・さて気を取り直して・・・お気づきの方もいるでしょうがああの三枚のカード、後にあの三人のデバイスになる予定です。うんキリ番近いしその時に名前とか募集しようかな？そこら辺活動報告の方に書くつもりですのでよろしかったら♪

また今回の分で一応年内の更新は終了の予定です。いつまた帰って来れるか分かりませんがいつかまたここでお会いしましょう！では私の小説があなたの人生の何かの糧となる事を祈って・・・ありがとうございました。

次回、空に羽ばたく^{バンッ}翼たち。

祝PV50、000hit！蒼碧カウンドンレディオ！

？『イイッショウタイムッ！！！』

智樹「わわっ！？」

スバル「え！？え！？」

蒼碧『レディースエンドジェントルメン！今回は50、000hit達成特別編！アンケートを行いたいと思います！』

智樹「わわっ！？なんだここ！？」

スバル「なにになに！？」

蒼碧『蒼碧がお届けするこの素敵なショーへようこそ皆様！今回は本編は一時中断！特別編をお送りしたいと思います！アップなテンションでお送りする暴走気味でゴメンなソーリー！それでもこれでも気にしない！今年最後の大騒ぎ！蒼碧カウンドンレディオ！お相手は私蒼碧と！』

イカロス『イカロスが・・・お送りします・・・』

智樹「いやいやいや待て待てお前ら！」

蒼碧『ん？何だよ智樹？』

智樹「何なんだよいきなりこれは！？」

蒼碧『何って……記念行事のレディオ?』

智樹「いやいやお前いいのこんなことやって!? 受験は!?!」

蒼碧『ダイジョブダイジョブキニシナイキニシナイ!』

智樹「気になり過ぎるんだけど!?!」

蒼碧『まあこんなギャアギャア言う奴はほつといていくよ!』

智樹「いい加減にしろおお!?!」

スバル「ト、トモちゃん落ち着いて!?!」

蒼碧『さて今回のレディオの目的は50,000hit達成アンド突破を記念して読者の皆様への感謝を表すと共に、作者の足りない頭にアイデアをプレゼントにくれというぶっちゃけたやつで……
「待て待て待て待て!?!」何だよ一々五月蠅いなあ!』

智樹「そんなぶっちゃけた話していいのかよ!?!」

蒼碧『仕方ないじゃんもうどうせ言うんだし。』

智樹「いやいやいや仕方ないじゃねえだろオイ!」

蒼碧『あーもうウルサイ!もう本題に入んぞ!イカロス頼む!』

イカロス『はい……分かりました作者さん……。では皆様、今回の説明を致します……。今回はこの前の回のあとがきにあった50,000hitを達成したらそはらさん、マスターのマス

ター、会長さんのデバイスの名前を募集するという宣言から企画された特別回です……。』

スバル「へえ」

蒼碧『と、いうワケでデバイス名募集を実施する事に至ったワケだ。』

智樹「なるほどなあってアイツら来んの!？」

蒼碧『それは言えないなだってお前主人公だし。』

智樹「お前ー!（怒）」

蒼碧『というワケでいってみようか!まずは守形のデバイス設定から!』

守形専用デバイス

声優繋がりで外見は仮面ライダーゴングナイトのドラグバイサーヅヴァイ。機能も殆ど本家と変わらない。しかしカードを入れるのではなく魔力カートリッジを後ろのカード装填口から入れるようになっている。

ソードモード、シュートモード、サモナーモードに可変する事が出来る。

なおドラグランザーは召喚獣となっておりサモナーモードで呼び出せる。

バリアジャケットは守形の学生服のまんま。

ボイスイメージは元々の龍騎のバイザー音声。

魔力光は銀色。

イカロス『続いてそはさんのデバイスです……。』

そはら専用デバイス

そはらの周りの空間に巨大な魔力で形作られた手を発生させる手袋型のデバイス。

攻撃、防御、運搬など様々な用途で使える。高速で振り回せばその辺一帯がバツサリと切れたりする。

そはらの手の動きと連動して動き、大きさは十階建てビルの大きさにまで拡張出来る。バリアジャケットは相撲大会で着たステージ衣装の覆面無しバージョン。

ボイスイメージは美名さん。

魔力光はカーマイン。

蒼碧『最後に会長のデバイスだ！』

マイク型のデバイス。会長の言った事を魔力によりそのまま現実にしてしまう恐怖のチート武器。（例えば圧殺と言えば上から鉄球が、銃殺と言えばどこからともなく黒服が現れ銃を乱射する等。）

とりあえず何にでも応用が効くチートの一文字。

バリアジャケットは紫の下地に金で蝶の刺繍をあしらった着物

ボイスイメージは会長の組長。おじさん
魔力光は紫。

智樹・スバル『……………』

智樹「ど、どいつもこいつもヒエエエエエエツ！」

蒼碧『というワケでこの三つのデバイスの名前を募集致します！応募方法は簡単！これだ！とお考えになりました名前に名前の理由、感想、ご意見、やってほしいこと等を添えられまして感想に書かれて下さい！』

イカロス『一人いくつでもよろしいですのでふるって応募下さい……………』

蒼碧『ではこの辺でお別れとしましょう！ほれ主人公たち！ポイツ（――）ノ　ハカンペ』

智樹「わつと！？（パシッ！）え、えーと！？」

スバル「なにになに？……………なるほど！じゃあやろう！トモちゃん！」

智樹「分かったよ……………んじゃ！」

智樹・スバル『皆様からのご応募、お待ちしておりますーす！』

蒼碧『というワケで蒼碧カウンタウンレディオ！今回はこれでお開き！次回をお楽しみに！See you again！Next year！』

祝PV50,000hit!蒼碧カウンタウンレディオ!(後書き)

・・・福岡ネタ使いすぎたかな・・・。

七話「空に羽ばたく翼（パンツ）たち。」（前書き）

皆様ただいまッス！蒼碧、恥ずかしながら帰ってまいりました！では大変長らくお待たせいたしました！七話、どうぞ！

七話「空に羽ばたく翼（パンツ）たち。」

side 智樹

カンカンッ！キュ！キュ！

「おゝイトモ坊！そっち終わったか？」

「あ、はい！もう少しっス！」

ヴァイス兄の声に俺はスパナの手を止め答える。

「早くしとけよー！アイツらが何時でも最高の状態で現場に行けるようにしとくのが俺たちの仕事なんだからな！」

「はゝいっス！」

ヴァイス兄の言葉に俺はそう返し、再びスパナで調整をしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうも、智樹です。俺とイカロスがミッドチルダに来て一週間。俺は六課のへりの整備をしています。それというもの・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「お前にやって貰うのはバックヤードとロングアーチの仕事だ！」

「バックヤード？ロングアーチ？何じゃそりゃ？」

あの衝撃の夜から一夜明けた翌日。窓の外でシャワー室の修理が行われているのが見える中、俺は昨日の審議と共にあの模擬戦のへ勝った方が負けた方を好きなようにしている。『という権利の結果を聞きに来ていたが、開口一番、ちびつ子が言ったのはその言葉だった。

「その・・・それって何すんだよ、ちびつ子？」

「ッ！ちびつ子じゃねえ！ヴィータだ！」

「まあまあヴィータ……。バックヤードとロングアーチいうんはな？」

怒り狂うヴィータをはやてが押さえ、はやてはこちらに向かって言う。

「前線のスターズ、ライトニング分隊の後方支援……。ま、言うなればお手伝いさんみたいな仕事や。」

「なるほどな。って俺あんま電子機器とか弱いぞ？機械弄りならたまにやってるけど。」

俺がそう言うとはやては少し考え、何かを考えつくと俺に向かって言う。

「そうなんか？うん・・・あ、でもあるで？智樹君にピッタリな所。」

「ホントか？で、それどこ？何て部署なんだ？」

「それはやなあゝ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

と、云うワケで俺は今ここ、機動六課のヘリの格納庫でヘリの整備をしている。

まあ元から兄弟や、パンツロボNシステムを作ってたから工具の扱いには慣れてるし、なかなか良い仕事だ。

「っし！出来た！」

「お、終わったか？」

機体の調整を終え、振り返った俺に話しかけてきたのはこのヘリのパイロット、ヴァイス・グランセニツク陸曹だった。ヴァイス兄とはここに配属された日に意気投合し、こちらからはヴァイス兄、あちらからはトモ坊と呼ぶ仲だ。（勿論、アチラ側の話とかで意気投合したんだがな。）

「いやあゝトモ坊が整備すると何だか性能が伸びたように感じるんだよなあゝ！」

『そうですね、稼働効率が30%以上も上がっています。』

ヴァイス兄とその相棒のデバイス、ストームレイダーは言う。

「そんな……！それほどでもないっすよ！」

俺は少し照れて顔をかく。

「でもエンジンだとか触った事とかないんだろ？」

「ハイっす。（まあ他の動力機関を弄った事はあるんだけどな。）」

ヴァイス兄の言葉に俺は答えた。

「じゃあスゲエじゃねえか！こんな歳でよお！」

「い、いやあ〜」

そんなこんなで言っていると、

『ま、俺のサポートが無けりゃ改善どころか改悪だろうがな。』

「オイシエル！どういう事だ！」

シエルが言う。ちなみに俺とスターは三日間程離れさせられていた。……ま、カメレオンステルスモードだとかの装備を見りゃシャーリーさんの研究者魂に火がつくのは当然だし、何より俺が工口い目的の為に使用する事を禁じる為もあったんだろ。返された時、スターはかなりヘトヘトの状態で帰って来た。その所為か、シエルはかなり苛立っていた。

『あん？お前はただ俺の解析した結果を見て指示通りにやってるだけじゃねえか！ったく……！俺に腕がありやもつと良く出来んのによ……！』

「うるせえよ！大体お前が帰ってくる間の三日間は俺一人で頑張ってたんだぞ！なあヴァイス兄！」

俺はヴァイス兄に同意を求めたが、

「あ、ああ……まあな……（汗）」

どこか遠くを見つめ視線を逸らすヴァイス兄。どうしたかと思うとストームレイダーが言う。

『残念ですがトモキ……稼働効率が急激にアップしたのも4日前からなのでスターによるものが多いかと……』

「……（。D）」

「い、いや別にお前一人の整備が悪いつてワケじゃねえんだよ！いや待て待て！そんな顔しなくても大丈夫だから！」

ガクッ！

「……」

「お、おーい！？トモ坊！？」

俺はガツクリとうなだれた。

『ハッハッハッ！やっぱ違いが分かるよなあ？アッハッハッハッハッ！』

（チクシヨオ〜！自分のデバイスに馬鹿にされんなんて〜！）

そんな風にガツクリ肩を落としてると後ろから、

「ヴァイス君、智樹君おはようさんな〜」

「八神部隊長！」

「ん？はやて？」

いつの間にか来ていたはやてが話しかけてきた。

「おはようございますっス！お仕事、ご苦労様です！」

「そんなに気を張らんでもええよ？ヴァイス君。……ってどうしたん智樹君？えらい元気無さそうやけど。」

ヴァイス兄にそう言ったはやてはこちらを向き言う。

「ああ……まあな……。」

『大丈夫だ八神。コイツは自分自身のダメさに落ち込んでるだけだから。』

「オイシエル！またお前！」

はやてに返した俺だった。がシエルがまた気持ちを落とす。

「まあまあ。ケンカはよくないんよ？」

『む……。』

はやてはそう言い、俺たちは口論を止める。

「そうそう♪……うん、智樹君頑張っとるみたいやな。」

「そうなんすよ！トモ坊、ホント素人と思えなくて……！なあストームレイダー？」

『はい、とても助かっています。』

はやてがヘリを見渡し、俺に向かって言う。その言葉にヴァイス兄とストームレイダーも同意した。

「い、いやあ〜」

『だから調子に乗るんじゃねえぞ。』

「う、うるせえ！わかってるよ！」

俺は照れたがシエルがすぐにツツコミを入れる。まったく……！わかってるっつーの！

「……ん！もうこんな時間が、智樹君、ヴァイス君、うちはこれからちよつと用があるからこれだな。」

「あ、ハイ！お気をつけて！」

「またなはやて。」

「ほなな〜」

はやては手元の時計を見てそういうと隊舎の方に向かっていった。
俺たちが手を振り見送ると俺の腹が、

グウウ。

「あ。」

盛大になってしまった。するとヴァイス兄が言う。

「はは、どうやらお前の腹は昼時みてえだな。行ってこいよ、食堂。
ちょうどアイツらも終わったみたいだしな。」

「アイツら？『トモちゃん！』ああ、なるほど。じゃ、お言葉に
甘えるっス。」

とヴァイス兄と話していた俺に後ろから走りながら話しかけてきた
のは……。

タッタッタッタツ！！

「トモちゃん！お仕事終わった？」

陸士の制服を着たスバルちゃんだった。スバルちゃんは満面の笑み
で俺に尋ねる。

「ああ、ちょうどな。」

俺は着ていたつなぎを脱ぎながらスバルちゃんの問いに答えた。(ちなみにつなぎの下は俺に支給された陸士の服で、胸元に【民間協力者 桜井智樹】と書かれたバッチを付けている。)スバルちゃんは笑顔をさらに輝かせながら言う。

「ホント！？じゃあ一緒にご飯食べよ？ちょうど私たちも今訓練終わっただ！」

「おお、分かった。ちょうどお腹ペコペコだったんだよねー！」

「じゃ、行こう！」

俺の返答にスバルちゃんは笑いながら俺の手を取り駆け出した。

「わっ！とっ！」

俺は少し前のめりになりながらも一緒に駆け出した。後ろではヴァイス兄が青春だねえとか言ってた。ジジイか！

・・・・・・・・・・・・・・・・

タッタッタッタッ！

「ティアー！みんなごめーん！」

「遅いわよスバル！」

スバルちゃんに手を引かれやってきた先に居たのはティアナ、エリオ、キャラの三人だった。

「あはは……。ゴメンゴメン！」

怒るティアナにスバルちゃんは謝り、ティアナがやれやれといった顔をする。そうしているとエリオがこちらに気づいた。

「あ、トモキさん！」

「おうエリオ、お疲れさん。」

「はい！トモキさんもお疲れ様です！」

エリオは俺に労いの言葉をかける。

「エリオ、このバカに労いの言葉は不要よ。」

「なっ！バカとは何だティアナ！」

いきなりのティアナの言葉に反論する俺。するとティアナは言う。

「言葉の通りよこの変態バカ！」

「言っただけのノーコン！」

「なっ！ノーコンって言ったわねこのエロ変態バカ！」

「事実を言っただよ事実を！この前のシャワー室の事だっただに当たったの五発ぐらいじゃねえか！あんなに何発も撃ってたクセに！」

「くっ……！か、関係ないでしょこのドエロ変態ドスケベバカ！」

「さっきよりヒデエンじゃねえか！？」

「何よ！文句あんの！？」

言い合いになる俺とティアナ。それを見たスバルちゃんとエリオ、キャロは言う。

「2人とも止めてー！」

「押さえてくださいトモキさん！」

「ティアナさん！お願いします！」

『何だよ（よ）！！関係ないだろ（でしょ）！！』

『はうっ……！！』

俺とティアナのあまりの迫力に三人はシュンとなる。そうして俺たちが睨み合いを続けようとしていると、

「こらこら、ケンカしちや駄目じゃない。」

『ん？』

クルリと全員が声のした方へと振り返る。するとそこには……。

『なのはさん!』

「なのは。」

なのはがいた。なのはは俺とティアナに近づいて言う。

「こら、智樹君駄目じゃない女の子にそんな事言っなんて。」

「だってそれは「だってじゃないの。」ッガッ!？」

ゴンと軽く……だが確かに重いゲンコツを食らう俺。なのはは続けて言う。

「女の子には優しくするって、習わなかった？」

「っ……! わかったよ……。……悪かったなティアナ。」

俺はなのはの言葉に折れて顔をティアナに下げる。ティアナは少し顔を赤くしながら言った。

「べ、別に! いいわよ……。 (私も少し悪かったし……。 / / / /」

「へっ?」

「っ! / / / / な、何でもないわよ! / / / /」

ベシッ！

「げふーっ！な、何すんだー！」

「う、うるさい！何でもないっていつてるでしょ！（バシッ！）」「いや待てまた何でゲフッ！？」・・・ほ、ほらみんなサッサと行くわよ！／＼／＼／＼／」

何故かいきなり顔を真っ赤にしたティアナから殴られる俺。俺は抗議の声を上げるが、俺の抗議を無視してまた平手打ちを俺の頭に加え、サッサと行ってしまった。り、理不尽だ・・・！

「り、理不尽過ぎるぜ・・・！（ガクッ）」

「ト、トモちゃん！？」

「し、しっかりトモキさん！？」

スバルちゃんとエリオが気遣うが、当たり前どころが良かった性が俺の意識はフェードアウトしていった・・・。

・・・

「ふ、ふがつ！」

「あ、気がついた？」

目が覚めるとそこに目の前にいたのはスバルちゃんだった。

「ス、スバルちゃん？え、えっと……。何だったけか？俺、さっきまで何してたんだ？」

先ほどの記憶とかがなかなか曖昧なんでスバルちゃんに聞いてみるが、スバルちゃんはビクツ！と身体を震えさせて明後日の方を向きながら答える。

「あ！？え、えっと！な、何だったんだろうね！(汗)」

「うーん……。とりあえずなんかオレンジ色が頭から離れないんだけど」だ、大丈夫だよ！無理しなくても！」……。そうか？」

「そうそう！そうだよ大丈夫だって！(汗)」

「そ、そうか？……。ならいいけど。」

あまりにも必死に話を逸らそうとするスバルちゃんの姿に俺はこれ以上詮索するのは気が引けたので話を止める。スバルちゃんはその姿を見てホッと胸をなで下ろしたようだった。

「あ、えっと……。そういやここは……。ってもう食堂か？」

「あ、うん、そうだよ。トモちゃん立てる？」

「おう、大丈夫だぜ。」

俺が周りを見渡すと先ほどまでいた外ではなく、六課の隊舎の中にある食堂だった。念のためスバルちゃんに聞くと肯定の言葉が返っ

てきた。俺が立ち上がると、スバルちゃんは手を差し伸べながら言う。

「じゃ、トモちゃん、ティアたちの所に急ご？待たせてるし。」

「おう、わかった。」

そして俺はスバルちゃんと一緒にティアナたちが待っていたテーブルに向かった。テーブルに近付くと、エリオとキャロがこちらに気づき声を上げた。

「あ、トモキさんだ！」

「トモキさん！大丈夫でしたか？」

「おう、わりいエリオ、キャロ、待たせたな。」

『いえ！』

ホントに元気に声を返してくれる2人。ホントにいい子だね……。！と、思った傍らティアナの事に気づき俺は言う。

「ティアナもわりいな。時間とらせて。」

「……別に。」

「?.....。」

何だか不機嫌そうな返事が返ってきた。……。俺なんか怒らせたか？色々と気になったが、敢えて触れないことにした。と、その

時ガラガラと台車を引く音が聞こえる。見るとそこには昼食が載せられた台車を引く……

「皆様……昼食をお持ちしました……。あ……。！マスター……。！」

「イカロス！」

イカロスがいた。ちなみになんでイカロスが昼食を運んでいるかというと、実は俺がロングアーチの職を言い渡された日にイカロスが「私にも何か出来る事はないのでしょうか。」と言ったのだった。それから悩みに悩んで結局俺とはやての機転で食堂勤務の仕事にイカロスは落ち着いたのだった。

「マスターも……。お食事ですか……。？」

「おう、時間も時間だしな……。そうだ、お前も一緒に食べようぜ！」

「いえ……。私はまだ仕事……。」「あーもういいのいい！とりあえず座れて！」……。はい……。。」

という感じで半ば強制的にイカロスもテーブルに座らせた。ちなみにイカロスは背中の羽を通す為の穴が空いた特注の陸士の制服と胸にイカロスと書かれたバッチを身につけていて、エプロンと三角巾を装備していた。

「さてと、飯だ飯！」

「お腹ぺこぺこですよー！」

「きゅるるっ」

何とかイカロスを座らせて、上から俺、キャロ、フリードの順にそれぞれの感想を言う俺達。そんなこんなしてる俺達の目の前にゴトツと置かれたのは……

「……何時見てもコレはとんでもねえよな……（汗）」

「ふえ？ほう？（へ？そう？）」

そこには古典的マンガのご飯大盛りのように、大皿にこれでもかと盛られた山盛りのナポリタンがあった。

「ふえふひほあいひいたひようひやひやいほほもうふえど（別に大した量じゃないと思うけど）……？」

「いや、アンタの別に普通ってのはみんなの普通な訳じゃないからねバカスバル。後口に物入れたまま喋んないの。」

呆然としていた俺に、すでにナポリタンをほうばっていたスバルちゃんと言うが、すかさずティアナからツッコまれた。

「む！（モグモグ……ゴクン！）あ、ゴメンゴメンティア。」

「全く……！私はアンタのお母さんか何かか……！」

「えへへっ♪ティアお母さ〜ん♪」

「のるなアホ！」

そんなこんなで二人が漫才やってる中、俺はエリオとキャラロの方を向いて話をふる。

「ま、まあでも最初はやっぱり驚かなかったか？この量。」

「そうですね。私とティアナさんはあまり食べる方じゃないですから……。今はだいぶ馴れましたけど。」

俺の問いにキャラロは答える。キャラロはティアナと同じく取り皿に小さく盛って食べているが、エリオはというと……

「あはは……。流石にこの量は最初はビックリしちゃいますよね。でも訓練してたらどうしてもお腹が空いちゃって……。！」

スバルちゃんと同じように、自身の取り皿に大量に盛って食べていた。

（うーむ……。あの身体ん中のどこに入るんだろうか二人とも……。！）

そんなことを考えながら、俺はフォークに麺を絡ませて口に放り込む。何だかんだ言っても味はかなり美味かった。コレは是非ともイカロスに作り方を教えさせておいてもらおう。

（こんな美味しいもん、一人じめ出来ねえしな……。空美町に帰えれたらアイツらにも食わせてやりたいし。）

ふと、頭にニンフやらバカ（あすとれあ）やらそはらやら会長やら先輩やらカオスやらクラスメートの顔が浮かぶ。心配……。して

くれてんのかな・・・？いや、逆にウチのクラスの女子どもとは『ゴキブリ桜井最近見くない？あー良かったセイセイした！』
と思っただろうな・・・と、考えてて虚しくなってきた・・・。

「ははは・・・ハア。」

「あれ？どうかしたのトモちゃん？」

俺のため息にスバルちゃんが心配してくれたのか、声をかけてくれたが、こんな事で心配させるワケにはいから慌てて俺は言葉を返した。

「い、いや！？何でもないぞなんでもない！」

「・・・そう？」

「あ、ああ！大丈夫大丈夫！」

「・・・そつか。」

（・・・つぶう・・・！あー危なかった・・・！）

あまりの必死さにスバルちゃんも引き下がってくれた。そのまま食事を終えて、スバルちゃんたちは仕事、デスクワークイカロスもまた仕事場に帰っていったので、俺もヴァイス兄んとこ戻るかと思っていた時。

ヴィー！ヴィー！ヴィー！ヴィー！

「！？」

いきなり警報が鳴り響き、壁に設置されたスピーカーから放送が入る。

アラート アラート
【緊急事態！緊急事態！現在ミッドチルダに謎の．．．えっ！？
何これ．．．！／／／パ、パンツの怪物が出現！／／／六
課に出動要請です！】

「パ、パンツの怪物！？」

俺はいきなり言葉に度肝を抜かされたが、とりあえず状況確認のために、ヴァイス兄さんそこへ走った。

．．．．．

「おい！みんな！」

「トモちゃん！」

俺がヘリポートに着くと、すでにスバルちゃんたちとなのは、ちびっこ、シグナムさんがいた。

「今．．．！放送で．．．！怪物って．．．！（ぜー．．．
はー．．．ぜー．．．はー．．．！）」

息切れ切れに話す俺に、なのはが話す。

「うん、ロストログアの疑いもあるから六課に出動がかかったの。
でも……。」

「何なんだろうな、あのふざけた怪物。」

「とにかく、行くしかあるまい……。」

ちびっこ、シグナムさんと続く。その言葉になのはは頷き、スバル
ちゃんたちの方へ向き直る。

「それじゃあみんな、相手はこちらも何も掴めてない正体不明物だ
けど……、訓練を思い出して、決して自分が一人じゃないって
ことを頭に入れて、気を抜かずに頑張ろう！」

『はいっ！』

なのはの言葉に全員が返事を返し、ヘリに乗り込んで現場へと向か
って行った。

一方俺はちびっこにお前はロングアーチとバックヤードの仕事をし
ろ！と言われて置いてかれたんで、とりあえず何か出来る事はない
かと、司令室の方へ向かった。

……

side ティアナ

「何よ……！コレ！？／／／／」

私たちが現場であるミッドの市街地にたどり着いた時、私はその異様な光景に戸惑った。何故なら……！

『パァーンゾー！』

『きゃあー！／／／／／』

巨大な……いや、パンツが集まって出来たパンツの顔をした怪物が、避難をしようとする人のパンツも引き寄せて、只でさえ巨大な身体を更に巨大化させていたのだ。

「な、なんと破廉恥な怪物だ……！」

「と、とりあえずみんな行こう！まずは避難退路の確保を最優先に……して……」

『はいっ！（わかった！なのは！）（了解した、高町！）』

なのはさんの指示で、みんなが一斉に怪物に向かおうとした時、突然怪物がこちらに気づいたのか、こちらを向き雄叫びを上げた。

『パァーンゾー！』

スポンッ！

『へ？』

私は身構えて応戦しようとしたが、変な擬音が聞こえてきたので、

思わず立ち尽くす。そしておもむろに顔を上げてみると、そこには・
・・・！

「へ、へ！？パ・パ・パ・パンツ！？／／／／／」

パンツが鳥のように翼を羽ばたかせて空を舞っていた。

「な・・・・・！へ・・・・・！は・・・・・！／／／／／」

「な、なのはさん！？ヴィータ副隊長！？シグナム副隊長！？」

声に振り返ると、なのはさんとヴィータ副隊長、シグナム副隊長がそれぞれスカートの中を押さえていた。

「な、な、な、何で！？何でアタシのパンツがー！？」

「・・・・・（固まっている）」

「も、もしかしてこれってあの怪物のせいなの・・・！？」

「うがー！アタシのパンツを返せー！」

「ヴィ、ヴィータ副隊長！落ち着いてー！」

怒るヴィータ副隊長をスバルが押さえる。なのはさんとはかく、シグナム副隊長は固まってしまっただけで動かない。そうしていると、今度は

「うわああああ！？／／／／／」

「っ！？エリオ！？」

「アワワワワワワ／＼／＼／」

「エリオくん！？エリオくん！？」

エリオが声を上げる。振り向くと、そこには自身の鼻血の海に横たわるエリオと、その横でスカートを押さえながら手を握りエリオの名を呼ぶキャロがいた。

「ちよっ！？二人ともどうしたの」

「エ、エリオくん、私のパンツの見ちゃって……！」

「ど、どんだけ純情なのよエリオ！」

なのはさんはともかく、スバルはヴィータ副隊長を押さえて動けなくて、エリオ、キャロ、シグナム副隊長も無理……！

（こ、こうなったら私一人で……！）

そう思った矢先、怪物の腕がこちらに向かってきた。

『パァーンズー！』

「っ！？」

ガシッ！

「きゃ、きゃあああああ！？」

「ティア!?」

大量のパンツで作られた腕で捕まえられてしまった。固いワケではないのだけど、パンツが絡まってしまつてて抜け出せない……!

「だ、ダメ……!」

(だ、誰か……!)

「ティアー!」

怪物がそのまま腕を振り下ろそうとしたその時。

ザンッ!

「へ?」

怪物の腕が切り裂かれ、私は重力に従つて落ちていく。しかし、

ドサッ

「え?」

誰かに腕で受けとめられた。上を見上げてみると……

「ト、トモキ!?」

「わりいなティアナ、遅くなつた!」

トモキがそこにいて、私を受けとめてくれていた。

side 智樹

俺が司令室に向かおうとしていたが、スターに通信を傍受しろと呼び止められていた。

「通信を傍受って・・・！いいのかよ！？」

『あーもううるせえ！とにかく繋ぐ！』

そんなこんなで、通信を傍受すると、スバルちゃんたちのパンツがスポーンと脱げてしまい、そしてティアナが怪物に捕まってしまったのだった。

「っ！おいスター！行くぞ！天覇絶槍モードだ！」

『承知！』

んで、ジャケットを纏うと、転送装置のカードを使って現場であるミッドに飛んだのだった。

「ト、トモキ！？どうして！？」

「どうしても何も、お前がピンチだったからに決まってるだろ？」

「ッ・・・！！／／／／／」

俺は顔が真っ赤になったティアナを下ろして、怪物に向き直る。

「行くぜ幸村！」

『承知！．．．．熱源探知！親方様！真ん中に核らしきものが！』

「わかった！一気に突っ切るぞ！」

俺は槍を構え、叫んだ。

『「天覇一掃！」』

その言葉と共に、俺たちは赤い閃光となり、怪物の腹を突き破った。

『パ、パァーンズー．．．．！？』

バサア．．．．！

そうして突き破られた怪物は形を失ったが、パンツはそう、まるでイカロスが落ちてきて間もない頃のパンツが飛んでいったように．．．！

「．．．．パンツが．．．．！」

「飛んで行く．．．．。」

「．．．．んー．．．．。デジャヴ？」

「あれ？トモちゃん、槍刺さってるそれって．．．．？」

「へ？」

槍の先に刺さっていたもの、それは……

「コレって……イカロスさんのカードよね？」

(……あ！)

俺は先日イカロスに残りのカードを確認させた時の事を思い出した。

……

「カード後何が残ってた？」

「マスターの持たれている転送装置のカード以外に……後三枚ほど……。どちらもマスターの望みを叶えるだけのカードですが……。」

「そっか……。 (まああん時の失敗もあるし、あまり考えないほうがいいな……。 あ、でも……やっぱりエロい能力だったらしいなあ……。！) 」

……

「あ、あん時の奴がヤバかったのか……！」

「あん時って……！ っていう事かしら……！」

「へ？」

あ、やべえ！口滑らした！と振り返るが時すでに遅し。そこには鬼の形相のティアナ、なのは、ちびっこ、シグナムさんが、そして呆れ顔のスバルちゃんが立っていた。

「トオ〜モオ〜キイ〜！」

「智樹くん……！」

「トモキ！アタシのパンツどうしてくれんだ！」

「……レヴァンティンの錆となるがいい……！」

「す、す、す、すいませ〜ん！？！」

『許すかああああああ！』

ドカツ！バキッ！ザシュ！ペシリッ！ペニン。ギッコンバツタンギルコンバルタン

「フンギヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

『……この世にバカの栄えた試し無し、……でござるな……』

七話・了

七話「空に羽ばたく翼（パンツ）たち。」（後書き）

というワケで、第七話、いかがでしたでしょうか。受験の関係で長く空いてしまいましたが、面白く書けているか、少し気がかりです・
・
・。そこら辺は感想を頂けると嬉しい限りでございます。後私事ではありますが・
・
・。無事、受験の方は合格いたしました！応援して下さい皆様、本当にありがとうございます！では、これから更新速度を上げれるよう、精進致しますので、これからもよろしくお願い致します！

次回、「おいでませ海鳴^{みづな}」

八話「おいでませ海鳴（ふるさと）」（前書き）

遅くなってしまってすみませんでした！では、どうぞ！

八話「おいでませ海鳴（ふるさと）」

「出張任務？」

「うん、急なんだけどね。」

あの騒動から2日が経った頃、なのは達が俺の部屋に来て、この事を伝えた。ちなみになのは達にズタボロにされた後、何だかじいちゃんに一瞬呼ばれた気が……、とまあどうでもいい話は後にして、俺はそもそも何でなのはが俺に出張任務の事を教えてくれたのか、訊ねてみる事にした。

「で……。何で俺にまで伝えたワケ？」

「それがね……。」

なのははちょっと困った顔を、隣にいたフェイトさんとお互いに向けあう。そして向き直り、フェイトさんが言う。

「その出張任務先がね、第97管理外世界の事なんだ。」

「へえー第97管理外世界か。それって確か……ってええ!？」

「そう、私とはやてちゃんの故郷がある地球なの。」

俺は驚いた。以前なのははやての故郷の事を聞いた時、ほとんど俺たちの町や暮らしと変わらなかった事から、なのはとはやての魔法の才能の事はともかく、なのは達の地球じゃあそんな魔法的イベントは起こりっこないだろうと、たかをくくっていたからだ。

「まあウチらの事は偶然中の偶然やしな。それに今回の件は事故で起こった事やし。」

「事故？」

はやては苦笑いしながら答え、そしてこの六課設立時に、後ろ盾となってくれた聖王教会からの情報が書かれた用紙を渡してくれた。(ちなみにミッド語で書かれたんで、その後はやてに読んでもらった。)その情報によると、移送中にロストログアが無くなってしまったとの事だった。

「……事情は大体わかったけどよ、それとこれと俺にどう関係があるわけ？」

「それはやな、単刀直入に言うと、まず一つ目に人手が足りんということや。」

ガクツと大転けをする俺を尻目に、はやては続けて言う。

「二つ目に、智樹君にはウチらの地球と殆ど変わらへん地球から来とる分、ウチらの地球の一般常識とかが判るやないか。何分ウチら六課はウチとなのはちゃん、フェイトちゃん、それとヴィータにシグナム、シャマルにザフィーラはともかく、地球は初めての子が多いし……補助して欲しいんよ。」

「なるほどな」ってフェイトさんとかは地球に行ったことあるんだ。

「

「あはは……。私は子供の頃に地球にやってきてね……。」

「まあその話はおいおいにしていって……三つ目や。」

「何だよまだあんの？」

フェイトさんがどこか遠くを向いて言っている、はやてが言う。

「そや、三つ目に智樹君に会わせたい人があるんよ。」

「会わせたい人？」

「まあ、それは会ったのお楽しみや。ほな、なのはちゃん、フェイトちゃん行こか。」

そう言うてはやて達は去っていく。

「あ、ちょっと！おい！」

呼び止めようとするも、はやてはなのはとフェイトさんの手を引いて足早に去って行ってしまった。

「ったく……何なんだ……？」

行ってしまった方向を向いて、

「……会わせたい人……？」

俺は疑問を空にばやいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「と、いうワケで今から出発だ！」

「・・・・何処に向かって言ってんのよバカトモキ。」

というワケで俺は今ヘリポートにいる。隣にはスバルちゃん達が既に準備していて、俺の横にはイカロスもいた。そんな中、ティアナが俺の発言に突っ込む。

「いや、読者のみんなに報告を・・・・「ゴチンツ！」ったー!？」

「メタ発言すな！」

「うるせえよ！文句なら作者に言え作者に！」

「まあまあトモちゃんもティアも落ち着いて！」

俺とティアナが作者に対するメタ発言をしていがみ合っていると、スバルちゃんがなんとか止めようと間に入る。と、その時いきなり冷たい風が吹き荒れ始め、俺は足を凍らされた。

「なっ!? なんじゃあコリヤア!？」

「この氷って・・・・!」

ティアナが振り返り、驚愕の顔を浮かべる。見るとそこには苦笑いのなのは達隊長陣と、少し涙目になってるリンだった。

「こ、こらゝ！ケンカしちゃダメですうゝ！」

そう言つて冷たい風を一段と強くするリイン。こ、氷がどんどん上に……！？

「わ、わかつた！待てリイン！このままじゃ全身こ……お……る……。。。」

「わあー！？トモちゃんが氷付けに！？」

「リ、リイン曹長！もうやめてあげてください！？」

………

「ふ、ふがつ！？」

「あ、トモちゃん！」

「んあ？ああスバルちゃん？ここは……？」

なんかデジャヴを感じる会話をスバルちゃんとしながら、体を起き上がらせる俺。見るとそこは湖のほとりにある結構大きいコテージだった。

「ここは今回の任務での私達の拠点でなのはさんのご親友、現地の協力者の方の別荘なんだって。」

「なるほどな、ってもう着いたのか。」

「あはは……。トモちゃんリン曹長の凍結魔法で暫く固まっちゃってたからね……。」

「ああ……。そういやそうだったな……。あはは……はあ。」

そんなこんな話していると、近くで車が止まる音がする。誰だろうと見てみると、黒塗りの車から降りてきた金髪の女性が、買い物袋を携えてこちらに向かって来ていた。

「あ、アリサさんお帰りなさい！」

「おー、ただいまスバルちゃん。あ、その子起きたんだ。」

「はい。あ、そうだ！なのはさんに連絡しなくっちゃ！すみません、ちよつと行つてきます！」

「え、あ、スバルちゃん！？」

俺は声をかけるが、『ちよつと待っててねー！』と言って行っちゃった。と、とりあえず金髪のこの人に挨拶すっかと思って、話しかけてみた。

「え、あ、えつと……。桜井智樹です。」

「アリサ・バニングスよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

（は、話が続かねえ・・・・・・！）

そんなこんなでうるたえていると、

「ねえ。」

「は、はいっ！？」

あちら側の方から話しかけられる。

「あなたがこの前なのはが言ってた、不思議なカードを使う子？」

「あ、え、は、はあ・・・・・・。」

「どっちなのよ！はつきりしなさいよ！」

「あ、ああもう！はいそうですよ！」

そんな感じで半やけくそで言つと、

「うん、よろしい。やっぱ男ははつきり言える人じゃなきゃ。」

「あ・・・・・・・・え・・・・・・・・は、はい・・・・・・・・。」

相手のあっさりした返答に、肩すかしを食らってしまった。

「ま、改めてあたしはアリサ・バニングスよ！よろしくね智樹！あ、

アリサで良いわよ。」

そう言つて手を差し出してくるアリサさん。俺は呆氣に取られながらも握り返した。

「あ、ああよろしくアリサ。」

うんうんと頷きながら手を固く結ぶ俺とアリサ。そうしていると、スバルちゃんが戻ってきた。

「トモちゃ〜ん！」

「スバルちゃん。なのは達どこに居るって？」

「うん、えつとね。なのはさん達は今なのはさんのご両親が経営されている喫茶店にいるそうだよ。」

「ああ、翠屋の事？」

『ふえ？』

アリサの言葉に同時に振り向く俺とスバルちゃん。アリサは話を続けた。

「翠屋かぁ……。連れてつてあげたいんだけど……。あたし今からちよつと用事があるからねえ……。」

「うーん……。あ、じゃあアリサ！その住所分かるか？」

「え？え、ええ分かるけど……。あんたどうすんのよ？」

「こうすんの！」

そう言つて俺はポケットから転送装置のカードを取り出し、装置へとカードを変化させた。

「なっ！？あ、あんた！一体どうやったのよ！というよりそれであんな一体どうするわけ！？」

驚愕するアリサに俺は答えた。

「これは転送装置になつててな。色々な物をどこへでも転送出来るつてわけ！」

「ああ！なるほど！さっすがトモちゃん！」

「へっへえ〜！我ながらナイスアイデアつてね。」

「……驚いたわね、不思議なカードつて言つてたから興味深かつただけど……こうとはね。これはさすがが喜びそうだわ。」

変化した装置に三者三様の言葉を述べていたが、ここで俺はあることに気付いた。

「はっはっはー！……つてあれ？そっぴやスターどこいった？」

そうである。スターがないのだ。大抵転送装置と同じ所に入れてたはずなのだが、どうも見つからない。そんな風に言っているとスバルちゃんが答えてくれた。

「あ！そついやトモちゃん！スターだったらイカロスさんと一緒にどこかに行くって言ってたよ。」

「イカロスが？どこへ？」

「うん、トモちゃんの住んでた場所の所に行つて……」

バサアツ……！

「来ました……。」

『つておわあああああつ！？』

突然のイカロスの着陸＆発言に度肝を抜かされる俺とスバルちゃん。するとイカロスが手に持っていたのかスターが話す。

『全く……これぐれーの事で驚きやがつて……。それにトモキ、おめーはチョーシにのりすぎた。』

「うつせーよシエル！……で？どうだったんだよ結果は？」

『残念ですが親方様……この前の結果と同じく、親方様の住まわれていた空美町はこの地球上には存在しませんでした……。』

「そつか……。」

「マスター……。」

「トモちゃん……。」

少し俯く俺にイカロスとスバルちゃんが心配するが、俺はなるべく明るい声で言う。

「ま、なるようになれだ！・・・手掛かりが無くてものなんとかはなるさ。」

そんな俺の様子にスバルちゃんは少し驚きながら聞く。

「え・・・えつと・・・。トモちゃん、大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないって言ったら大丈夫じゃないな・・・ま、でも焦っても仕方無いしな。」

「・・・そつか。そうだねトモちゃん！」

「おう。んじゃ、なのは達の所に行くか。あ、そうだ。イカロスも来いよ。」

「はい・・・マスター・・・。」

イカロスは頷き、スターを手渡した。俺はそれを受け取り、転送装置を起動させる。

「よし。んじゃ、行こうぜスバルちゃん。」

「うん、分かったよトモちゃん。」

そしてアリサが手を振るのを見ながら転送装置を作動させ、俺たちはなのは達の所へと向かったのだった。

.....

ギューイイイインッ！

「よつとー！」

「わわつとー！」

流石に翠屋の目の前にすぐ転送すれば色々とヤバいことになりそうなので、目の前のビルとビルの間転送してきた俺達は誰も居ないことを確認して翠屋の前に来ていた。

「ここがなのはさんのご両親がやっている喫茶店かぁ。」

「ま、とりあえず入ろぜ。にしても良い匂いだなぁ。」

「だねぇ。」

店の中から漂ってくる良い匂いを嗅ぎながら、俺はそう言ってドアを開けた。

カランコロン！

「ああ、スバル、智樹君。いらっしやい。」

「なのはさん！トモちゃんの目が覚めたので連れて来ました！」

中に入った俺たちに声をかけるなのはへ、スバルちゃんが敬礼をしながら言い、なのはいいいいよといった感じに手を振るいながら答えた。

「にやはは・・・そんな敬礼なんてなくていいよスバル。任務中とは言え、今は一休みしてる感じだしね。」

「は、はい、なのはさん。」

なのははうんうんと頷いた。すると後ろから黒髪で眼鏡をかけた女性がコーヒーと紅茶、ついでにココアらしきものを持ってきた。

「なのは、お待たせ。・・・って彼女と彼が言ってた二人？」

「あ、お姉ちゃん！うん、そうなの。」

「お姉ちゃん！？」

お姉ちゃんの言葉に反応してか、スバルちゃんが驚きの色を隠せないでいると、さらに厨房の方から栗毛色の髪をした女性と黒髪の男性が現れた。

「追加のクッキーと！」

「翠屋特製シュークリームよ。」

「お父さん、お母さん。ありがとね。」

『お、お、お、お父さん！？お母さん！？』

俺とスバルちゃんは度肝を抜かれた。何故ならなのはのお父さんお母さんはどう見てもなのはのお兄さんかお姉さんに見える見た目だったからだ。

「お、君たちがなのはの教え子さんとお仕事の協力者の子かい？」

「あ、はい！スバル・ナカジマと言います！」

「えっと……桜井智樹ツス。」

「……イカロスです……。」

「ははは、元気があっていいね！私は高町士郎、この喫茶翠屋のオーナーでなのはの父親だ。で、こちらが妻の桃子、そっちが娘の美由紀だ。」

『よろしくね。』

『は、はい、よろしくお願いします……。』

俺たちはビックリし過ぎて色々と力無く返事をした。で、それからなのはが座るよう言ってきたので、とりあえず席に座った。席にはなのはの他にエリオ、キャロ、ティアナが座っていたが、ここである違和感に気づいた。

「ん？なあ、なのは。」

「？どうしたの智樹君？」

俺はなのはの横に座っている子を指差しながら言う。

「このリインに似てる子ってどこの子だ？」

『なっ！？』

ピキッ！

なのはの横にはリインによく似たエリオとキャロと同じ歳ぐらいの子供がいた。・・・アレ？なんかプルプル震えてるぞ？

「リ、」

「リ？」

「リインはリインなのですよー！！」

「ええ？声も似てるけど・・・俺の知ってるリインはもっとこんなに小さい」リインはリインなのですー！トモキさん何て事言うんですかー！「ウッソー？」

リイン（仮）はプンプンと俺をポコポコ叩きながら言う。するとエリオがフォローを入れる。

「あ、あのートモキさん、リイン曹長は身体のサイズの変更が出来るそうなんですよ。」

「そ、そうなのです！いつもは燃費の良い小さい形態なのですが、今は場所が場所ですしこのサイズになってるのですよー！」

リインが胸を張って言う。

「へえ、そうなのかぁ……………」

「な、何なのですか！？顔を近付けて！」

「リイン…………サイズ変更出来るわりには胸は育たなかったんだな。」

ビキキッ！！

「ん？何だ今の音？…………ってリイン？何震えてるんだ？」

「ト…………！」

「ト？」

「トモキさんのエッチイイイイイですううううう！なのはちやんやフェイトちゃんに続いてリインも狙うつもりですかー！！」

「なあ！？待て待てリイン何言って「ドスッ！」…………ふえ？」

『え？』

俺が反論しようとしていると何か変な擬音が聞こえたのでそちらに向いてみると、俺の後ろに刺さっていたのは…………包丁。

「…………つてええ！？」

「…………桜井智樹君、と言ったね。」

『!?!?!?』

ゾクッ!とした気配と声のした方に振り向くと、そこには笑っているが、奥では絶対笑ってない顔の土郎さんが、何故か木刀を手に持って立っていた。

「え、えっと……!し、土郎、さん!？」

「……リインちゃん……さっきはどういう事かな？」

「ふえ!?!え、えっと!」

「答えないいつものココアから砂糖を抜いて純正ココアに変えてしまいそうだが……」

「ひゃうっ!?!わ、解ったのですう!実はこの前トモキさんが覗きをしてたですう!なのはちゃん達の胸を掴んでたですう!」

「あ!コラリイン「ほう……!」!?!」

いつの間にか後ろにいる土郎さん。ホントにいつの間にだよ!?

「桜井君……!嫁入り前の娘に……!」

「あわわわわわわわっ!?!」

「何をしてるんだあああああああ!」

「おわあああああああ!?!」

ザンッ！

「あつぶねー……っておわあああああ！？切れてるう！？」

振り下ろされた真っ直ぐな土郎さんの太刀（木刀）はさっきまで俺が座ろうとしていた椅子を易々と切り裂いていた。こ、この人ホントに人間か！？尋常ではない殺気に周りにいるみんなは恐怖に襲われたのか、ガタガタと震えに震えていた。

「逃したか……！」

「ひいつ！？」

ユラリとこちらを向く土郎さん。これは……最悪死ぬ！？イヤイヤ！こんな所で死ぬるか！そんな風に思っていると、幸村が念話を使つて話しかけてくる。

親方様！転送装置を使われて下さい！

分かつてるよ！でも……！

「ハアアアアアッ！」

「ひひひひひ！」

今は避けなので精一杯イイイイイ！？

次々と繰り出される土郎さんの剣技にだんだんと壁に追い詰められ

る俺。

「さあ．．．覚悟はいいかな．．．？」

「ムリムリムリ！？ムリっすから！」

「問答無用おおおおお！！」

非情にも振り下ろされる木刀。

（ダメだ．．．！やられるううううう！）

その時。

カランコロン。

「こんにちはー！お久しぶりですおじさんおばさん、美由紀さん．．．って何コレ！？」

「おや、久しぶりだねフェイトちゃん。」

店に入って来たのはフェイトさんだった。そしてフェイトさんに気を取られ、土郎さんは手を止め、木刀が俺の顔の目の前で止まる。

親方様！今が好機！

「くっ！転送！」

「何！？」

ギューイイイイイインッ！

・・・・・・・・・・・・・・・・

ギューアアアアアッ！

ドサッ！

「げふっ！……た、助かったあゝ！」

ギリギリの所で転送出来たが、場所を選択を適当にしてしまったので俺はここがどこなのか分からなかった。辺りは森に囲まれていて、唯一近くの家のなのか、大きい屋根が見えた。

「とりあえず逃げたのは逃げたけど……ここは？……
ってな！？で、でっけえ家だなあ……！」

森を抜けるとそこには大豪邸と言うに相応しい豪邸があった。とりあえず豪邸に近付いて行くと、何故か見知った顔がいるのに気付いた。

「ん？あれって……はやてか？オーイ！はやてかあゝ？」

「うん？この声は……って智樹君！？何でここにおるん？」

はやてはどうやらこの屋敷の主人のような青い髪の毛の女性と話していたようだった。と、ここで俺はある物体に気付いた。

「あ、ああちよつとな……って……え？」

「ん？智樹君どうしたん？」

「いや……それ……！」

俺の指差した先には何故か大量にいる猫と一緒に座り込んでいる金髪ロングで、ダイナマイトなバデューで、背中から翼が生えた……

「ア、ア、ア、アストレア！？」

「え？あー！トモキ！」

そう、二人目の天使^{ばか}だった。

八話・了

八話「おいでませ海鳴（ふるさと）」（後書き）

八話・了、ということでもとりあえず本当にすみませんでした！楽しみに待ってて下さった皆様にご迷惑をおかけした事を深く反省しています。私蒼碧、自身の大学の準備に追われてまして、なかなか完成に手間取ってしまいました。本当にすみません。これからもっと頑張っていきますので出来れば応援宜しくお願いしますね。ではまた次回！よろしくお願い致しますね！

PS、インフィニット・ストラトス×仮面ライダー電王の形のISの小説とか・・・読みたい？

九話「現れた二人目の天使（ばか）」（前書き）

遅れてしまって申し訳ありませんでした！ではどうぞ！

九話「現れた二人目の天使（ばか）」

「ア、ア、ア、アストレア!?」

「あーっ！トモキ！」

（前回までのあらすじ！出張任務の為、なのは達の故郷である第9管理外世界、地球にやって来た六課メンバー＋智樹＋イカロス。なのはの父母の経営する喫茶翠屋での一騒動の後、命からがらコテージへ戻った智樹を待っていたのは二人目の天使^{あほ}だった。）

「な、な、な、なんだってお前こんな所に居るんだよ！」

「何よ！悪いって言うのこのバカ！」

「な！バカとはなんだよこのバカ！」

「バカをバカって言って何が悪いのよ！バカバカ！このバカ
！」

「うるせえよ！このヴァーカ！」

「バカバカ！」

「ヴァーカ！」

「あ、あの〜智樹君？」

「バカ！バカバカ！」

りあつとんねん!？」

「は、はやて!?!なんかキャラ違うぞ!？」

「うるさい!とにかく説教や説教!二人とも早よ座りい!正座や正座!」

仁王立ちで啖呵をきりいつもとは全く違う鬼の形相で叫ぶはやてに俺とアストレアは正座をしながら反論する。

「ええ〜。作者がやつと構成まとめて更新したそうそうに説教か？」

「はいっ!はいはい!この小説の人氣落ちるんじゃないですか!」

「うるさいねん!メタな発言をすな!半ページほどやるで!」

そう言いはやては説教を始めた。

sideはやて

「大体始まって早々からバカバカ罵りあつてなんや?智樹君、アストレアちゃんは智樹君の世界の人やなかったんやないのか?だったら何で罵りあつとんねん!・・・うちはな、思うに最近の子は恵まれとうと思うんよ。S M A Pさんが言ってた『ナンバーワンよりオンリーワン』、いい言葉やけどはたして本当の意味が伝わってるんやろうか?『自分さえ良ければいい!』、『努力する奴は寒いよね〜』・・・そんな便利な逃げ口上にしてしまつとるんやないか?『子供は風の子』!!!寒い時にこそあえて外に飛び出してゆく勇

気！たくましさ！！・・・しかし、今のケータイの普及にとともにコミュニケーションの方法も変化してしまつとるんやそうなんやけど・・・昔ながらみたいに同じ体験を肌で共有する素晴らしさを失つちやいかんと思うんよ。・・・『きのこの山の奥にたけのこの里があつたとさ』・・・という詩を知つとうか？明治製菓の昔やつてたCMの歌や。『きのこの山』の大発見に慢心することなくさらなる探求をして当時まだ誰にも知られておらんかった『たけのこの里』を発見したんや。・・・『ボクはなにもしていないをしているんだ。』・・・という言葉聞いた事あるか？クマのプーさんの言葉なんや。・・・スッゴい事言いよるよな・・・さあ！だからそんなケン力は止めて話をするんや！」

(・・・受け取つてや、うちの熱いメッセージを・・・！)

そうやって熱弁したうちやつたけども、肝心の智樹君達は・・・

「・・・ふ、ふがつ！？ああ、終わったかはやて？」

「はいっ！はいはい！意味がわからなかったのもう一度言ってくれませんか？」

「・・・！！」

受取人不在やつた・・・。

「う、うう・・・！すずかちゃん！」

「は、はやてちゃん泣かないで！？」

泣き崩れるうちをすずかちゃんが支えてくれ、励ましてくれた。

やっぱり持つべきはいい友達やなあと思つとると智樹君はアストレアちゃんを指差しながらうちに言った。

「はやて、まあアストレアに説教しても無駄だぞ？コイツ基本的にバカだし。」

「そんなこと言つたつて自分の来た時の事ぐらいは覚えてるんやないの？」

「そつか・・・アストレア、お前どうやってこつちに？」

「ふんっ！あんたになんか教えない！」

智樹君が聞くが、アストレアちゃんはそっぽを向いてしまった。

「お前なあ・・・『あ・・・えっと・・・』？あんたは・・・」

side 智樹

声に振り返るとそこには先ほどからはやてと話していた青い髪を口ングにした女性がいた。

「あ、はじめましてだったね。私は月村すずかっというんだ。よろしくね、智樹君。」

「あれ？どうして俺の名前を？」

俺が不思議に思っていると、復活したはやてが俺に言った。

「うちが今回の任務での拠点でするかちゃんに頼んだ時にちょうど色々はなしてな。その時についてに聞いたんよ。」

「なるほどなあ。」

俺が関心しているとすずかさんが話しかける。

「あの……いいかな？」

「あ、ああわりい。で、話ってなんだ？」

「うん、その子……アストレアちゃんがここに来た時、こんな物と手紙を持っていたの。」

そう言っですずかさんは懷から紙と携帯電話を差し出してきた。俺はそれを受け取るとその手紙に書かれていた名前を見て驚愕した。何故なら……

「これは……す、守形先輩から!？」

そう、手紙は守形先輩からの物だったのだった。手紙にはこう綴られていた。

【智樹、お前がもしアストレアに合流したのなら、すぐにその携帯電話にある番号にかけまくれ。俺達もそちらに向かっている……。
。守形英四朗】

「さすがは守形先輩！」

そう言いながら電話をかけてみたが、

《おかけになった電話は、電波の届かない所に……》

「って意味ねーじゃん！」

繋がらなかったのだった。

「まあまあ智樹君、もしかしたら地球に居らんで、ミッドに居るん
かもしれんしな。」

「そつか……そうだな。まあ色々焦っても仕方ねえからな。」

そうして携帯を自分のポケットに入れているとはやての方になのは
の方からサーチャーの設置が終わったという連絡が入り、俺たちは
一路アリサの待つコテージへと向かったのだった。

……

「イカロス先ばぁーい！」

「アストレア……！」

先に到着していたなのは達の中にイカロスを見つけ出したアストレ
アは脱兎のごとく駆け出し、イカロスに抱きついていて。そしてそ
の光景に、スバルちゃん達は固まっていた。

「あ……えっとトモちゃん、これって……！」

「まさかトモキさんの世界の人、なんですか……？」

「おお、アストレアだ。まあ正確にはイカロスと同じエンジェロイドだけだな。」

スバルちゃんとエリオの質問に答える俺だったが、ここで俺はあることが気になったので聞いてみた。

「そう言えばあの後士郎さんって……？」

「……あの後なのはさんのお母さまが士郎さんを止めてたわ……あまり思い出しく無いけど……。」

「わ、わりいなティアナ……！」

若干疲れた顔をしたティアナに軽く説明をして貰ったが、あの士郎さんを止めたとなると実は一番強いのは桃子さんなのか！？と一人恐怖する俺だった。

その後、手伝いにとフェイトさんの義兄さんであるクロノさんの奥さんのエイミイさん（かなり大きい胸）、フェイトさんの使い魔であるアルフ（ちびっ子って言ったらちびっ子「ヴィータ」と同時に殴られた）、そして先ほど喫茶翠屋であった……。

「あの時はほんとにすみませんでしたー！」

「いって顔上げなっ！」

なのはのお姉さんの高町美由紀さんが来たのだった。

そして食事の準備が終わり、各々が自己紹介を終えると宴会が始まったのだった。

「むぐ！ほひひいゝ！（うん！おいしいゝ！）」

「だから口に入れて喋るなバカスバル！」

「「あはは・・・お肉、大丈夫かなあ・・・。」」

「あ！このバカアストレア！勝手に俺の肉食ってんじゃねえよ！」

「むぐつ！？ま、まふほほはははふあふあいんひやへほ（な、なんの事かわかないけど）！？」

「現段階で食ってんじゃねーかよ！じゃあこれは俺の肉だ！」

「むぐつ！？ひやへははひひょー（やめなさいよー）！」

「「大丈夫じゃなさそうだ！？」」

そんなこんなであつと言う間もなく食材がなくなってしまった。主にアストレア（ばか）のために。

そしてその後、汗をかいてしまっていたのではやてがいい笑顔である提案して、何故だか・・・

「それじゃ、」

「いきますか！」

「「「スーパー銭湯へ！」」」

『戦闘？』

「銭湯！？」

「はいっ！はいはい！それって美味しいんですかっ？」

銭湯へに行く事になったのだった……。

………

「いらっしやいませ！」

「えっと……大人子供合わせて……」

「へえ！ここが銭湯かあ！」

はやてが入湯料を払っている中、スバルちゃんは感嘆の声を上げる。

「こらスバル、他のお客さんとかもいるんだからあんまりはしゃがないの。」

「あ、ごめんごめんティア。」

初めての場所にテンション高めの

「しかしここも立派になったものだな・・・！」

「そーだな。」

シグナムさんとちびっ子がそんな会話をする。

「え？お二人はここに来た事あるんですか？」

「まーな。」

「この町にすんでいた頃に少しな。」

エリオの質問にシグナムさんが答える。そうしているとはやてが清算を済ませ、一同浴場へ向かったのだった。

s i d e r

「エリオ君も一緒に入ろうよ！」

「いやいやいやいや！？なんで僕が女湯に！？」

彼、エリオ・モンディアルの前にあるのは男湯と女湯と書かれたのれん。

「だってほら、そこに書いてあるよ？10歳以下はどちらにでも入れますって。」

「いやいやいやいや!? だめだって!」

「……私と入るの、いや……?」

その少女、キャロ・ル・ルシエの上目使いプラス涙目にうるたえる彼。

「いや、嫌ってわけじゃ……『そうだよ、久しぶりに親子水入らずで入らない?』フェイトさんまで! ト、トモキさん! ?どこに行っ たんですか! ? 助けて下さい! !」

そんな悲痛の叫びをエリオが上げる中、彼はというと……?

side 智樹

「イカロス、あのカードは?」

「はい、マスター……。」

イカロスから受け取ったのは、物質変換装置のカード。これさえあれば、男は何でも出来る。だが……

(もうこれ以上は流石に……命が危ないよなあ……。)

そう、俺は今の所ギリギリの綱渡りをしているのだ。

(今度なのはバレたら……ヤバい、じゃあすまないな……まあ今回は流石にもうできないか……! !)

そう思つてカードをイカロスに返し、普通に男湯に行こうとしていた時だった。

『……逃げるのか？』

「ッ！？」

（この声は……！？）

突然の声に、振り返るとそこにいたのは……！

「じ、じいちゃん！？」

『おなごの裸が見れるというのに……そのチャンスを逃すとは……お前はそれでも、桜井の家の者か！？』

「ッ！？」

（……忘れてたよ……！じいちゃん！この前母ちゃんと一緒に起こられてたばかりなのにな……！）

「イカロス……！カードを！」

「マスター……！」

俺は誰もいない事を確認すると再びあのカードを取り出し、天に掲げ起動させる。あの姿へと、変化を遂げるために！

（そう、これが・・・！これが俺の切り札！）

起動したカードが光り輝き、俺を包む。

光が収まり、そこにいたのはそうまさに・・・！

「久々の登場ね・・・！トモ子で〜す！きゃるう〜ん」

九話・了

九話「現れた二人目の天使（ばか）」（後書き）

本当に申し訳ありませんでした！

大学の生活がなかなか忙しく、更新が出来ない日々が続いておりました。

こんな残念クオリティで申し訳ありません。次回はクオリティを上げて、月二回で更新できるよう頑張りたいとおもっています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959o/>

そらのおとしものStrikerS

2011年5月1日06時03分発行